

RI*WAC

Research Institute for Women and Careers

日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0014
調査タイトル	「卒業生動向調査」
論文／雑誌名	「文学部教育学科卒業生その後」 『日本女子大学教育学科四十三年誌』
著者	牧野暢男・村松幹子
掲載ページ	pp.93-140.
発行年	1993.03
出版社	日本女子大学四十三年記念事業企画委員会

日本女子大学教育学科四十三年誌

日本女子大学教育学科四十三年記念事業企画委員会

目 次

第1部	文学部教育学科の歩み	石川松太郎	1
第2部	心理・教育学会の40年	國生雅子 大菅佳子	23
第3部	文学部教育学科卒業生のその後	牧野暢男 村松幹子	91
第4部	文集 教育学科によせて		141
資料	卒業生総数一覧		245
	「人間研究」(1~29号)総目録		247
	心理・教育学会役員および委員会、部会責任者名簿		261
	心理・教育学会回生委員名簿		266
	会報 創刊号および第21号		285

第 3 部

文学部教育学科卒業生のその後

牧 野 暢 男・村 松 幹 子

目 次

I. 調査の概要	
1. 調査の目的・ねらい	95
2. 調査対象・回収率	95
3. 調査内容	95
4. 調査方法	95
5. その他	95
II. 回答者の属性	
1. 学部・大学院別	96
2. 回 生	96
3. 入学方法	96
4. 出身高校	97
5. 住所とその移動	97
III. 大学生生活の評価と思い出	
1. 大学生生活の評価（満足度）	99
2. 大学時代の思い出	100
IV. 現在の生活状況	
1. 職 業	101
2. 結 婚	102
3. 子 ども	104
4. 社会活動（現在, 過去, 役員経験）	105
5. 友人関係	106
6. 幸福感	108
V. ライフコースの理想と現実	
1. 母親のライフコース	108
2. 大学時代に理想としていたライフコース	109
3. 実際のライフコース	109
4. 若い人たちに期待するライフコース	111
5. ライフコース相互間の関連	111

VI. 卒業生としての大学生活の評価など	
1. 日本女子大学での学習・体験の意味	115
2. 日本女子大学を卒業したことに対する感想	115
3. 子どもの日本女子大学入学への賛否とその理由	116
4. 後輩へのアドバイス	118
VII. 調査結果のまとめ	
1. 回答者の属性	119
2. 大学生活の評価（満足度）	119
3. 現在の生活状況	119
4. ライフコースの理想と現実	119
5. 卒業生としての大学生活の評価など	120
おわりに	120
資料（自由記述による回答の一部）	
・資料1 大学時代の思い出	121
・資料2 日本女子大学での学習・体験の意味	123
・資料3 日本女子大学を卒業したことに対する感想	124
・資料4 子どもの日本女子大学入学への賛否とその理由	128
・資料5 後輩へのアドバイス	131
調査票	136

文学部教育学科卒業生のその後

牧野暢男・村松幹子

I. 調査の概要

1. 調査の目的・ねらい

日本女子大学文学部教育学科は創立43年を迎え、平成5年3月に人間社会学部への移行をひとまず完了する。日本女子大学心理・教育学会 平成4年度会員名簿によると、43年間の卒業生は2735名であり、それぞれ各分野で活躍中である。しかし卒業後の動向について知る機会はなかなかない。本学科の卒業生が日本女子大学や教育学科での日々をどのようにとらえているのか、そして現在、教育学科あるいは日本女子大学に在籍したことをどのように受けとめ、その後の生活とどのようなかかわりを見出だしているのかなどについて明らかにすることが、今回、このような調査を計画したねらいである。この調査では、大学生活の思い出や評価、現在の生活状況、大学時代の友人との関係、理想のライフコース観や実際に歩みつつあるライフコースなどに関してその実態を把握したいと考えた。また、大学時代の思い出や日本女子大学でのよかった点・よくなかった点、後輩への期待などについてはできるだけ生の声を聞くこととした。

2. 調査対象・回収率

①調査対象（日本女子大学心理・教育学会 平成4年度会員名簿による）

日本女子大学文学部教育学科卒業生（新制2回生～新制42回生） 2735名

日本女子大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程前期（修士課程）修了生 91名

（内、日本女子大学教育学科卒業生42名）

博士課程後期修了生（満期退学者） 11名

（内、日本女子大学大学院教育学専攻博士課程前期修了者9名）

計2786名

この内、住所不明の者を除いて、2445名の卒業生を調査対象とした。

②回収率

調査対象とした2445名のうち、回答が得られた者の数は560名である。回収率は22.9%である。

3. 調査内容

調査内容は大別すると、①プロフィール、②日本女子大学での大学生活、③現在の生活状況、④ライフコース、⑤卒業生としての大学生活の評価などに分けられる。具体的な質問項目については、本稿の末尾に付した調査票を参照されたい。

4. 調査方法

調査は質問紙法を用い、調査票の配布・回収とも郵送で行った。1992年8月に調査票を配布し、9月10日頃までに記入した調査票を返送してもらう方法をとった（但しその後11月半ばまでに返送された回答も集計分析の対象とした）。

5. その他

本調査にあたっては、調査票の作成には、調査全体の責任を負った牧野暢男が岩木秀夫、村松幹子の2名と協力してあたり、集計分析は牧野と村松が共同で行った。また本稿の執筆は、最初に村松が全体の草稿を作成し、それに牧野が加筆し、また修正をほどこした。調査から原稿の執筆までの時間がかかなり短く、また紙数も限られているため、分析や説明が不十分な点もあるのではないかと思うが、ひとまずこのような形で調査結果をまとめることで責任を果たしたい。

ご多忙の中、本調査に協力して下さった卒業生の皆様には心から御礼申しあげるとともに、本稿がこれからの大学、そして日本女子大学を考えるための何らかの手がかりになれば大変幸いであ

る。なお、人間社会学部教育学科3年生の土居希久、藤枝充子、心理学科3年生の片山睦枝の学生諸君には、連日調査データの整理を手伝っていただいた。記して感謝したい。

II. 回答者の属性

はじめに回答者の属性について、その概要を示しておく。

1. 学部・大学院別

まず回答者の学部・大学院別についてみよう。

学部卒業生 553名

博士課程前期（修士課程）修了生 18名
（内、学部卒業生11名）

博士課程後期修了生（満期退学者）2名
（内、学部卒業生 0名、博士課程前期（修士）修3生 2名）

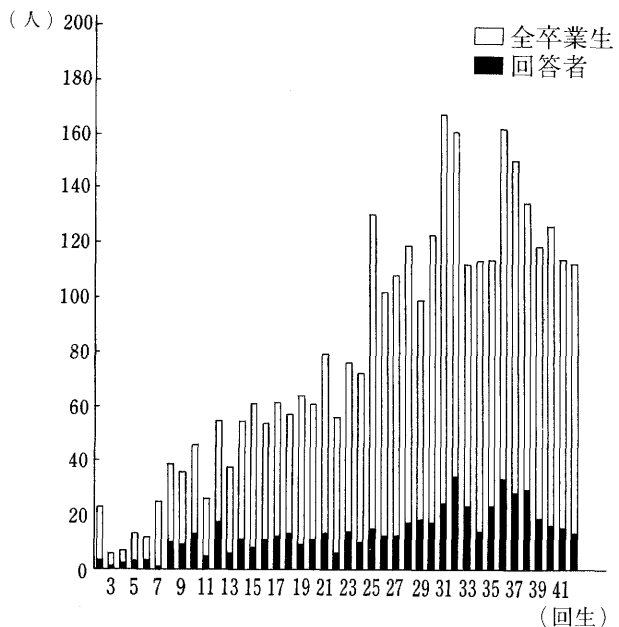
2. 回生

教育学科卒業生の分布を卒業年次（回生）別にみてみよう。分析対象者を回生別に図にあらわすと図表Ⅱ-1のようになる。また、回生を10年ごとに区切って4つのグループにし、その分布を示すと図表Ⅱ-2のようである。2～10回生は昭和23年度～昭和31年度入学、11～20回生は昭和32年度～昭和41年度入学、21～30回生は昭和42年度～昭和51年度入学、31～42回生は昭和52年度～昭和63年度入学である。

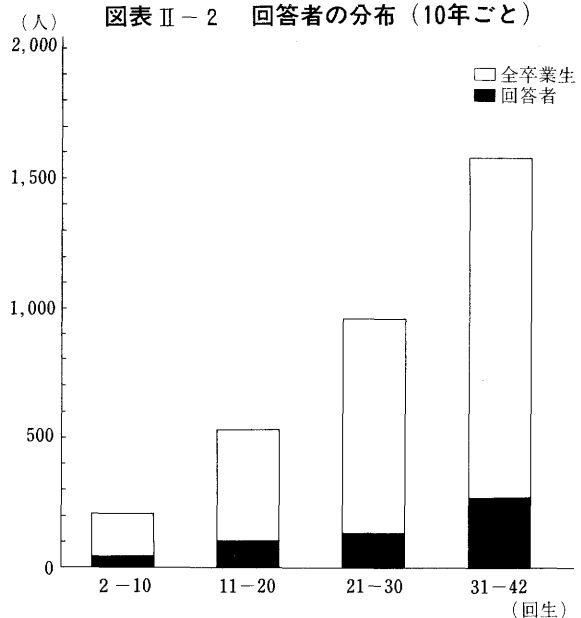
3. 入学方法

入学方法については、一般入試が70.4%、附属からの進学が29.6%となっている。この回生別分析結果を図表Ⅱ-3に示した。2～10回生までは一般入試がほとんどを占め93.3%であるが、11回生以降附属高校からの進学が増え、31回生以降は一般入試が61.0%、附属高校からの進学が39.0%となっている。

図表Ⅱ-1 回答者の分布



図表Ⅱ-2 回答者の分布（10年ごと）



回生によっては一般入試と附属校からの進学の割合がさらに接近している場合もある。

図表Ⅱ-3 入学方法（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	一般入試	附属からの進学	計
2-10回生	42 93.3	3 6.7	45 100.0
11-20回生	78 75.7	25 24.3	103 100.0
21-30回生	104 77.6	30 22.4	134 100.0
31-42回生	164 61.0	105 39.0	269 100.0
計	388 70.4	163 29.6	551 100.0

4. 出身高校

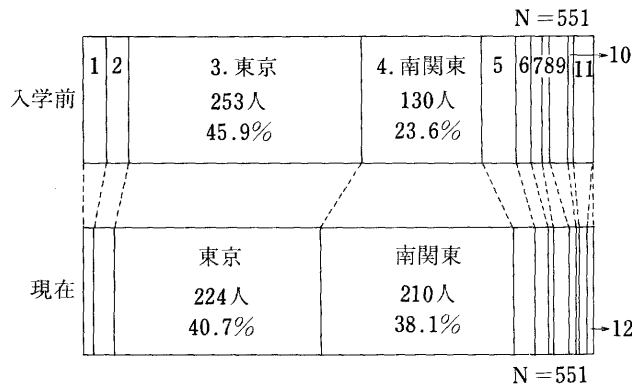
次に出身高校についてみてみよう。まず一般入試を経て入学した者についてみると、設置者別では、国立1.3%、公立79.3%、私立19.4%であり、公立出身者が最も多く、8割近くを占めている。共学・別学でみると、共学65.4%、別学34.6%と共学校出身者の方が多い。また附属高校出身

者についてどの段階から本学に入学したかをみると、「幼稚園から」は11.0%、「小学校から」は15.9%、「中学校から」は32.3%、「高校から」は40.9%となっている。

5. 住所とその移動

次に卒業生の住所についてみてみよう。大学入学以前の住所、現住所についての調査結果を示したものが図表Ⅱ-4である。大学入学以前の住所では東京が最も多く45.9%、次いで南関東が23.6%、甲信越静6.9%、北関東4.5%、北海道・東北4.4%と続く。関東周辺が多いものの、日本全国から教育学科に集まってきたことがわかる。現住所についても東京が最も多く40.7%、次いで南関東が38.1%、甲信越静4.4%、北関東4.0%と上位4地域までは入学以前の住所と同様である。続いて近畿、東海となっており、入学以前で5番目に多かった北海道・東北は7番目となっている。上位4位の順位は一致しているが、その比率には差がみられる。とくに目立った傾向がみられるのは、南関東であり、23.6%から38.1%へと増加している。入学以前と現在の住所の関係についてみたのが図表Ⅱ-5である。この表からも

図表Ⅱ-4 大学入学以前の住所と現住所



明らかなように、地方出身者では大学の4年間を終えた後に関東近県に居住する場が多くなっている。地方出身者に本学への就学を通じて、東京に職場を求め、あるいは結婚を契機に東京近県に居住するというケースが多いことを推測させる。

次に回生別分析結果をみてみよう。大学入学以前の住所の回生別分析結果を図表Ⅱ-6に示した。現住所はどのグループにおいても東京が最も多く、いずれも4割強から5割弱を占めているものの、その他の地域については回生によって傾向が異なっている。2~10回生では甲信越静の出身者が目立つ。しかしそれ以降

図表Ⅱ－５ 大学入学以前の住所と現住所の関連

単位 上段：人
下段：%

	現 住 所													
	北海道 東 北	北関東	東京	南関東	甲信越 静	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州 沖繩	海外	計	
大学 以前 の 住 所	北海道・東北	7 29.2	2 8.3	5 20.8	7 29.2	0 0.0	1 4.2	0 0.0	2 8.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	24 100.0
	北関東	1 4.0	12 48.0	4 16.0	6 24.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 4.0	0 0.0	0 0.0	1 4.0	0 0.0	25 100.0
	東京	2 0.8	4 1.6	162 64.2	62 24.6	9 3.6	2 0.8	2 0.8	4 1.6	1 0.4	0 0.0	1 0.4	3 1.2	252 100.0
	南関東	1 0.8	2 1.5	16 12.3	107 82.2	1 0.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 0.8	0 0.0	1 0.8	1 0.8	130 100.0
	甲信越静	0 0.0	1 2.6	13 34.2	8 21.1	12 31.6	1 2.6	0 0.0	2 5.3	0 0.0	0 0.0	1 2.6	0 0.0	38 100.0
	東海	0 0.0	0 0.0	1 6.3	5 31.2	0 0.0	9 56.2	0 0.0	1 6.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	16 100.0
	北陸	0 0.0	0 0.0	7 58.3	2 16.7	0 0.0	0 0.0	2 16.7	1 8.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	12 100.0
	近畿	0 0.0	0 0.0	3 33.3	1 11.1	0 0.0	0 0.0	0 0.0	5 55.6	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	9 100.0
	中国	0 0.0	0 0.0	7 33.3	5 23.8	1 4.8	1 4.8	0 0.0	2 9.5	4 19.0	0 0.0	1 4.8	0 0.0	21 100.0
	四国	0 0.0	0 0.0	2 40.0	1 20.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 20.0	0 0.0	1 20.0	5 100.0
	九州・沖繩	0 0.0	1 5.6	4 22.1	5 27.8	1 5.6	0 0.0	0 0.0	2 11.1	0 0.0	0 0.0	5 27.8	0 0.0	18 100.0
	計	11 2.0	22 4.0	224 40.8	209 38.0	24 4.4	14 2.5	4 0.7	20 3.6	6 1.1	1 0.2	10 1.8	5 0.9	550 100.0

図表Ⅱ－６ 大学入学以前の住所（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	北海道 東 北	北関東	東京	南関東	甲信越 静	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州 沖繩	計
2－10回生	2 4.3	1 2.2	22 47.9	3 6.5	7 15.2	1 2.2	1 2.2	3 6.5	3 6.5	0 0.0	3 6.5	46 100.0
11－20回生	5 4.9	3 2.9	45 43.5	20 19.4	8 7.8	5 4.9	3 2.9	1 1.0	5 4.9	1 1.0	7 6.8	103 100.0
21－30回生	10 7.6	8 6.1	60 45.9	20 15.3	10 7.6	5 3.8	5 3.8	2 1.5	7 5.3	1 0.8	3 2.3	131 100.0
31－42回生	7 2.7	12 4.6	122 46.5	84 31.9	13 4.9	5 1.9	3 1.1	3 1.1	6 2.3	3 1.1	5 1.9	263 100.0
計	24 4.4	24 4.4	249 45.9	127 23.4	38 7.0	16 2.9	12 2.2	9 1.7	21 3.9	5 0.9	18 3.3	543 100.0

図表Ⅱ－7 現住所（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	北海道 東北	北関東	東京	南関東	甲信越 静	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州 沖縄	海外	計
2～10回生	0 0.0	1 2.2	22 47.7	13 28.3	4 8.7	1 2.2	0 0.0	3 6.5	0 0.0	0 0.0	1 2.2	1 2.2	46 100.0
11～20回生	4 3.9	1 1.0	37 35.9	40 38.7	5 4.9	4 3.9	0 0.0	8 7.8	1 1.0	0 0.0	3 2.9	0 0.0	103 100.0
21～30回生	4 3.1	6 4.6	52 39.6	45 34.4	8 6.1	5 3.8	2 1.5	4 3.1	2 1.5	0 0.0	2 1.5	1 0.8	131 100.0
31～42回生	3 1.1	13 4.9	111 42.3	107 40.7	7 2.7	4 1.5	2 0.8	5 1.9	3 1.1	1 0.4	4 1.5	3 1.1	263 100.0
計	11 2.0	21 3.9	222 40.9	205 37.8	24 4.4	14 2.6	4 0.7	20 3.7	6 1.1	1 0.2	10 1.8	5 0.9	543 100.0

の回生では、南関東出身者が多くなっている。とくに31回生以降は南関東出身者が31.9%となっている。これは就学に必要な費用の増大と密接な関わりをもってしていると思われる。

また、現住所についての回生別分析結果を図表Ⅱ－7に示した。入学以前と比べて南関東へ移動する傾向があることについては前述の通りだが（図表Ⅱ－5参照）、回生別にみると若い世代ほど卒業後東京および南関東に住んでいる者が多い。2～10回生では76.0%、11～20回生では74.6%、21～30回生では74.0%とほぼ同じ傾向だが、31回生以降では83.0%にもよる。また11回生以降からは東京と南関東の比率が接近しており、南関東への定着傾向が一貫して強いことを示している。

Ⅲ. 大学生生活の評価と思い出

ここでは大学生生活について2つの観点からみていきたい。1つは大学生生活の評価（満足度）について、そしてもう1つは自由回答による大学時代の思い出である。

1. 大学生生活の評価（満足度）

大学生生活の満足度については、8つの項目について「非常に満足」から「非常に不満」の5段階で回答を求めた。その回答を図表Ⅲ－1に示し

図表Ⅲ－1 大学生生活の満足度

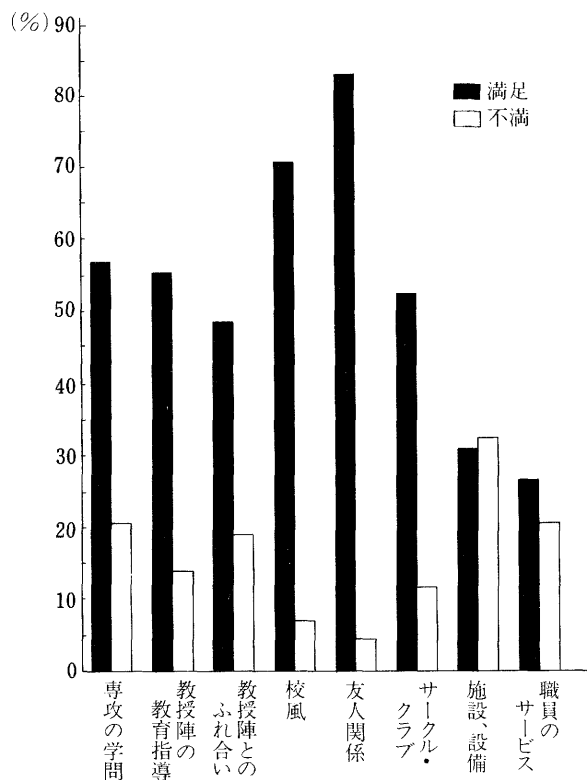
単位 上段：人
下段：%

	満 足	どちらとも いえない	不 満	計
a. 専攻の学問	314 57.0	123 22.3	114 20.7	551 100.0
b. 教授陣の 教育指導	309 55.6	169 30.4	78 14.0	556 100.0
c. 教授陣との ふれあい	269 48.6	179 32.3	106 19.1	554 100.0
d. 校風	390 70.7	122 22.1	40 7.2	552 100.0
e. 友人関係	460 83.2	68 12.3	25 4.5	553 100.0
f. サークル ・クラブ	189 52.4	197 35.8	65 11.8	551 100.0
g. 施設・設備	172 31.0	202 36.5	180 32.5	554 100.0
h. 職員のサービス	148 26.7	292 52.7	113 20.6	554 100.0

【注】表頭の「満足」は「非常に満足」と「どちらかといえば満足」の合計、「不満」は「非常に不満」と「どちらかといえば不満」の合計である。

た。項目によっては「どちらともいえない」という回答が多いものもあるが、この表をよりとらえやすくするために、「満足」と「不満」の比率を図表Ⅲ－2に示した。最も満足度が高いのは「友

図表Ⅲ-2 大学生生活の満足度…満足と不満



人関係、次いで「校風」であり、これらの点については不満度は他に比べて低くなっている。「専攻の学問」「教授陣の教育指導」「サークル・クラブ」については半数以上が「満足」と回答しているが、「教授陣とのふれあい」については「満足」と答えた者が、半数をやや割っている。また、「不満」の最も多いのは「施設・設備」であり、「職員のサービス」については「満足」と答えた者が最も少ない。

なお、これらの項目については、回生による違いはみられない。つまり教育学科に在籍した時期では、満足度・不満度に大きな差はないことが明らかとなっている。

2. 大学時代の思い出 (資料1参照)

次に大学時代の思い出に関する自由回答結果をみてみよう。「学生時代の思い出として、今、あ

なたの心に最も強く印象に残っていることはどんなことですか。2つまで書いて下さい。」という質問に対する回答を分類すると、ほぼ以下のような項目に分けられる。具体的な内容については、資料1を参照されたい。

a. 友人関係

大学生活を通してかけがえのない友人を得たことをあげた者が多い。しかし中には親友ができなかったことをあげている者もいる。

b. 授業

専門科目や実習についての思い出が強い者が多いようである。

c. 教職課程・教育実習

教育学科ならではの意見ともいえるかもしれないが、教職課程の専門科目や教育実習での経験についてあげている者が多くみられる。厳しい授業や実習でも、友人との交流、子ども達との出会いを通して良い思い出になっているようである。

d. 卒業論文

卒業論文についての意見も多い。「卒業論文を一生懸命やってそれが一冊の本のようになってうれしかったこと。」卒論は卒業生誰もが経験した難関であり、また大学時代に学んだものの集大成として、印象深い者が多いようである。

e. 学問の楽しさ

授業などを通して、学問の楽しさを知ったことを思い出として強く印象づけられている者も少なくない。

f. 先生との出会い・ふれあい

先生方との出会い、ふれあいを懐かしむ声も多い。

g. クラブ・サークル

大学生活の多くの部分を占めていると思われるクラブ・サークルについての思い出をもつ者も多い。

h. その他（寮・下宿生活、旅行・留学、学生運動、行事、カルチャーショックなど）

寮生活、旅行、学生運動、講演など自由に過ごした4年間についてさまざまな思い出があげられている。

以上、大学時代の思い出について自由記述による回答を中心にみてきた。友人との出会いや充実した講義、そして卒業論文、教育実習などについても多くあげられている。女子大生という派手、遊び好き、というイメージが先行しがちであるが、これらの回答からはむしろ堅実で実り多い大学生活を送った様子がうかがえる。後になってみると、遊んだり、当時楽しかったことよりも4年間という限られた時間の中で、精一杯力を尽くして過ごした時やものごと、そしてとくに厳しかった体験について、印象が強いようである。

IV. 現在の生活状況

ここでは卒業生が現在どのように過ごしているのか、職業、結婚、出産、社会活動、友人関係、幸福感などを中心に分析結果を示しておく。

1. 職業

はじめに就業形態、役職、業種、職種についてみてみよう。

a. 就業形態

「あなたは現在次のどれに該当しますか」という質問に対する回答結果を図表IV-1に示した。「フルタイム」と「パートタイム」で6割弱を占めていることがわかる。またフルタイム勤務者が4割を占めていることは注目に値しよう。

図表IV-1を回生別に分析した結果を図表IV-2に示した。回生と就業形態には密接な関わりがあることがわかる。2～10回生および21～30回生では「全く働いていない」者が最も多い。一方、11～20回生および31～42回生ではフルタイム

図表IV-1 就業形態

N=556

フルタイム	パート・アルバイト	全く働いていない	その他
224人 40.3%	100人 18.0%	184人 33.1%	48人 8.6%

図表IV-2 就業形態（回生別）

単位 上段：人
下段：%

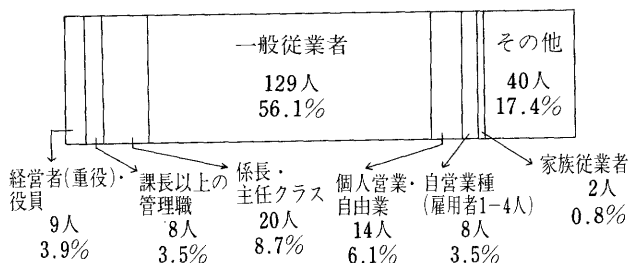
	フルタイム	パート・アルバイト	全く働いていない	その他	計
2-10回生	8 17.4	9 19.6	24 52.1	5 10.9	46 100.0
11-20回生	30 29.7	21 20.8	29 28.7	21 20.8	101 100.0
21-30回生	35 26.3	33 24.8	55 41.4	10 7.5	133 100.0
31-42回生	149 55.6	34 12.7	75 28.0	10 3.7	268 100.0
計	222 40.5	97 17.7	183 33.4	46 8.4	548 100.0

が最も多い。また11～20回生ではフルタイムが最も多いものの、「全く働いていない」、「パート・アルバイト」、「その他」のそれぞれに分散しているのが特徴である。

このような回生による傾向のちがいは、卒業生が世代によって選択する生き方を異にしていることを意味するのかもしれない。21～30回生で働いていない者が多いのは、子育てなどの状況による

図表IV-3 役職

N=230



ものと思われる。31～42回生においても現在はフルタイム勤務者が多いが、5年後、10年後には結婚・出産などにより周囲の状況の変化にともない、就業形態も変わり、21～30回生の就業形態に近づくことも考えられる。一方、現在子育てなどでフルタイム勤務が困難な世代も、子育てが一段落すればフルタイム比率が増加することも考えられる。

b. 役職

「あなたの仕事はどれにあたりますか」という質問に対する回答結果が図表Ⅳ-3である。一般従業者が56.1%と最も多い。これを回生別にみたものが図表Ⅳ-4である。一般従業者は若い世代ほど多く、年齢が上がるにつれて係長・主任クラス、課長以上の管理職、経営者（重役）・役員など重要なポストに就いている者が多い。

c. 業種

業種についての集計結果を図表Ⅳ-5に示した。教育関係が最も多く49.2%であり、教育学科の専門性がかなり生かされているといえるかもしれない。しかし見方を変えれば、半数以上の者は教育以外の業種に就いていることになり、メー

カー、マスコミ・広告・調査、金融・保険・不動産関係も目立つ。業種についてはとくに回生間で異なる傾向はみられない。

d. 職種

職種についての集計結果を図表Ⅳ-6に示した。専門的・技術的職業が最も多く54.7%、次いで事務的職業が27.1%と続いている。これを回生別に分析した結果が図表Ⅳ-7である。回生年次が新しくなるほど事務的職業に就いている者が多くなる傾向がみられる。これは教員になっている者の比率と関連があるのかもしれない。

2. 結婚

次に結婚を中心に卒業後の生活についてみてみることにしよう。

回答者の既婚・未婚別をみると、既婚者が77.7%、未婚者が22.3%である。回生別に分析した結果は図表Ⅳ-8から明らかなように、30回生までは既婚者の比率は9割を越えているが、31～42回生では4割近い人々が未婚である。

既婚者に結婚時の年齢を尋ねたところ、25歳までに結婚した者が55.4%、26～30歳までが39.9%、31～35歳までが4.2%、36歳～40歳までが0.5

図表Ⅳ-4 役職（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	経営者 (重役) 役員	課長 以上の 管理職	係長・ 主任 クラス	一 般 従業者	個人営業 ・ 自由業	自営業主 (雇 用 1～4人)	家 族 従業者	その他	計
2-10回生	0 0.0	1 12.5	1 12.5	1 12.5	1 12.5	1 12.5	0 0.0	3 37.5	8 100.0
11-20回生	7 21.9	3 9.4	5 15.6	2 6.3	3 9.4	4 12.5	1 3.0	7 21.9	32 100.0
21-30回生	0 0.0	3 7.9	3 7.9	15 39.5	7 18.4	1 2.6	0 0.0	9 23.7	38 100.0
31-42回生	2 1.3	1 0.7	11 7.3	111 74.1	3 2.0	2 1.3	0 0.0	20 13.3	150 100.0
計	9 3.9	8 3.5	20 8.8	129 56.7	14 6.1	8 3.5	1 0.4	39 17.1	228 100.0

図表 IV-5 業種

N = 189

1. メーカー	23人	4	5	6	7	8	9. 教育	10. その他
	21人						93人	25人
	11.1%						49.2人	13.2人

1. メーカー
2. 商社
3. 百貨店・専門店
4. 金融・保険・不動産
5. 運輸・通信・電気・ガス
6. マスコミ・広告・調査
7. ソフトウェア・情報処理
8. 官公庁
9. 教育
10. その他

図表 IV-6 職種

N = 236

専門的・技術的職業	129人	54.7%	事務的職業	64人	27.1%	管理的職業	10人	4.2%	販売の職業	8人	3.4%	サービス業	10人	4.2%	その他	15人	6.4%
-----------	------	-------	-------	-----	-------	-------	-----	------	-------	----	------	-------	-----	------	-----	-----	------

図表 IV-7 職種（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	専門的・技術的職業	管理的職業	事務的職業	販売の職業	サービス業	その他	計
2-10回生	9 56.2	2 12.5	2 12.5	0 0.0	0 0.0	3 18.8	16 100.0
11-20回生	26 68.4	3 7.9	6 15.8	3 7.9	0 0.0	0 0.0	38 100.0
21-30回生	22 51.1	3 7.0	9 20.9	1 2.3	2 4.7	6 14.0	43 100.0
31-42回生	70 51.1	2 1.5	47 34.3	4 2.9	8 5.8	6 4.4	137 100.0
計	127 54.2	10 4.3	64 27.4	8 3.4	10 4.3	15 6.4	234 100.0

%という結果が得られている。これを回生別に分析した結果が図表IV-9である。全体的に30歳までに結婚した者が多い。その中でも若い世代ほど26歳以降が多くなっており、晩婚化の傾向が示されているといえよう。31回生～42回生については未婚者も多いため、よりいっそう結婚時の年齢が高くなると推測できよう。

次に結婚の契機についてみると、既婚者の内、恋愛結婚が55.6%、見合い結婚が41.8%と前者のほうが多い。これを回生別に分析した結果が図表IV-10である。11～20回生だけが見合い結婚が6割を越えており、他の回生グループでは恋愛結婚のほうが多くなっている。11回生以降は恋愛結婚が増加しているように思われるが、とくに31

図表Ⅳ－８ 結婚（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	既 婚	未 婚	計
2－10回生	42 95.5	2 4.5	44 100.0
11－20回生	102 99.0	1 1.0	103 100.0
21－30回生	121 90.3	13 9.7	134 100.0
31－42回生	160 60.2	106 39.8	266 100.0
計	425 77.7	122 22.3	547 100.0

図表Ⅳ－９ 結婚年齢（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	21-25歳	26-30歳	31-35歳	36-40歳	計
2－10回生	26 61.8	13 31.0	2 4.8	1 2.4	42 100.0
11－20回生	66 65.3	31 30.7	4 4.0	0 0.0	101 100.0
21－30回生	64 52.9	46 38.0	10 8.3	1 0.8	121 100.0
31－42回生	79 49.4	79 49.4	2 1.2	0 0.0	160 100.0
計	235 55.4	169 39.9	18 4.2	2 0.5	424 100.0

回生以降は恋愛結婚が多く、回生によって傾向の違いがみられる。

また既婚者に対して「結婚に際し、『日本女子大学卒業生』ということが有利だったか」という質問をしたところ、有利だったと思った者は既婚者の33.2%とほぼ3人に1人の割合でいる。一方、「そういうことはなかった」という者は48.9%、「むしろ不利な条件だったと思う」0.8%、「どちらともいえない」が17.1%であり、あまり有利だったとは感じていない者が全体としては半数を占めている。

これを回生別に分析した結果が図表Ⅳ－11である。全体的に「そういうことはなかった」と回答しているものの、11～20回生だけは有利だったと回答している者が多くなっている。先の結果でも明らかのように（図表Ⅳ－10参照）、11～20回生は見合い結婚が多いことから考えて、見合い結婚の場合は日本女子大学卒業が有利にはたらいたと考えられている場合が多いと推測される。

3. 子ども

では次に出産や子どものことについてみてみよう。

既婚者のうち、子どもがいる者は84.5%、いない者は15.5%である。子どもの有無についての回

図表Ⅳ－10 結婚の契機（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	恋 愛 結 婚	見合い 結 婚	その他	計
2－10回生	20 47.7	19 45.2	3 7.1	42 100.0
11－20回生	34 33.7	64 63.3	3 3.0	101 100.0
21－30回生	63 52.1	57 47.1	1 0.8	121 100.0
31－42回生	118 74.2	37 23.3	4 2.5	159 100.0
計	235 55.6	177 41.8	11 2.6	423 100.0

生別分析結果が図表Ⅳ－12である。30回生までは結婚した人の場合、子どもをもっている者の比率が高くほぼ9割を占めているが、31～42回生では既婚者の33.1%が子どもをもっていない。

また子どもがいる者に対し、子どもの人数についてたずねたところ、2人が最も多く57.7%、1人が24.8%、3人以上が16.7%である。これを回生別に分析した結果を図表Ⅳ－13に示した。2～10回生では子どもを3人以上もつ者が3割以上を占めているのに比べ、新しい回生年次の者ほど子

図表Ⅳ-11 結婚に有利か（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	そう思う	そういうこと はない	むしろ不利な 条件	どちらともい えない	計
2-10回生	13 34.2	13 34.2	0 0.0	12 31.6	38 100.0
11-20回生	43 46.7	39 42.4	1 1.1	9 9.8	92 100.0
21-30回生	35 31.5	58 52.3	0 0.0	18 16.2	111 100.0
31-42回生	41 26.3	84 53.8	2 1.3	29 18.6	156 100.0
計	132 33.2	194 48.9	3 0.8	68 17.1	397 100.0

図表Ⅳ-12 子どもの有無（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	いる	いない	計
2-10回生	38 88.4	5 11.6	43 100.0
11-20回生	99 97.1	3 2.9	102 100.0
21-30回生	116 95.9	5 4.1	121 100.0
31-42回生	107 66.9	53 33.1	160 100.0
計	360 84.5	66 15.5	426 100.0

図表Ⅳ-13 子どもの人数（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	1人	2人	3人	4人以上	計
2-10回生	4 10.5	22 58.0	11 28.9	1 2.6	38 100.0
11-20回生	8 8.1	62 62.6	27 27.3	2 2.0	99 100.0
21-30回生	24 20.9	72 62.6	19 16.5	0 0.0	115 100.0
31-42回生	53 49.5	51 47.7	3 2.8	0 0.0	107 100.0
計	89 24.8	207 57.7	60 16.7	3 0.8	359 100.0

どもの数が少ない傾向が明らかである。とくに31～42回生では1人の者が49.5%と最も多く、半数近くを占めている。今日「少子化」が日本社会の課題としてよく話題となっているが、教育学科卒業生の家庭でも子どもは2人までというケースが多いようである。

なお既婚者の25.4%が今後出産予定があり、とくに31～42回生では59.7%と6割近い者が出産を予定している。出産予定としては2人が多く52.0%を占めている。

4. 社会活動（現在、過去、役員経験）

ところで、教育学科の卒業生は卒業後、社会活動にどれくらい参加しているのだろうか。どのような傾向があるかみてみよう。

ここでは次のa～kまでの各項目に対して「1. 現在している」「2. 過去にしていたことがある」「3. 役員をしている／していたことがある」のそれぞれについて回答を得た。

- a. 趣味や資格を活かした活動（茶道、生け花などの集まりなど）
- b. 学級・講座・教室などでの学習活動
- c. 行政から委託された活動（調停委員、民政・児童委員、保護司、施設運営委員・理事など）
- d. 地域社会活動（自治会、子ども会育成活動、青少年育成活動、PTA活動など）
- e. 社会奉仕（ボランティア）活動
- f. 政治活動
- g. 組合活動（生協活動など）
- h. 市民運動・住民運動
- i. 婦人団体活動・婦人運動
- j. 各種宗教活動
- k. その他の活動

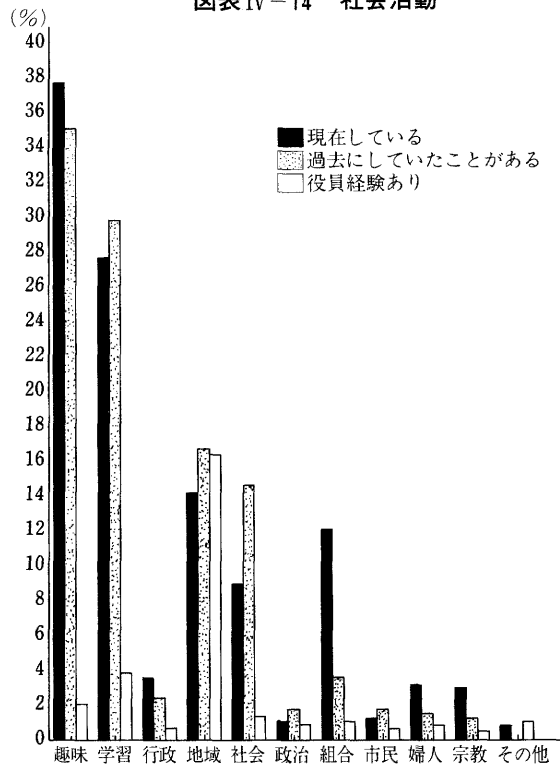
その結果を図表Ⅳ-14に示した。現在の活動についてみると、趣味、学習、地域活動、組合などにたずさわっている者が多い。また地域活動においては、何らかの役員経験をもつ者が多い。

全体的に回生との関連はほとんどないが、地域活動、社会奉仕活動をしている者の比率については関連がみられる。地域活動では現在の活動については21～30回生が多く、過去の活動については11～20回生が多い。社会奉仕活動では現在・過去にかかわらず、11～20回生が多くなっている。また役員経験でみると、地域活動では2～30回生に役員経験をもつ者が広く分散しており、他方、社会奉仕活動では回生グループ間で差がみられない。地域活動については、ある程度活動にたずさわる年齢層があることがうかがえる。社会奉仕については活動にたずさわる年齢にとくに特徴がみられない。

5. 友人関係

では卒業生は日本女子大学で得た友人とどのような付き合い方をしているのだろうか。「あなた

図表Ⅳ-14 社会活動



は現在、学生時代の友人とどのくらい付き合っていますか」という質問に対する回答結果を図表Ⅳ-15に示した。「つきあっている」と思っている者（「よくつきあっている」+「まあつきあっている」）は77.5%を占め、かなり多いといえる。「よくつきあっている」という者も3割を占めている。

これを回生別に分析すると図表Ⅳ-16からも明らかなように21～30回生だけが様相を異にしている。他のグループでは8割以上の者が「つきあっている」と回答しているのに対して、21～30回生

図表Ⅳ-15 友人関係

N = 560

よくつきあっている	まあつきあっている	あまりつきあっていない
169人 30.2%	265人 47.3%	115人 20.5%

全くつきあっていない

11人
2.0%

図表Ⅳ-16 友人関係（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	よくつきあって いる	まあつきあって いる	あまりつきあっ ていない	全くつきあって いない	計
2-10回生	17 37.0	22 47.8	6 13.0	1 2.2	46 100.0
11-20回生	33 32.0	50 48.6	19 18.4	1 1.0	103 100.0
21-30回生	26 19.4	56 41.8	45 33.6	7 5.2	134 100.0
31-42回生	89 33.1	134 49.8	44 16.4	2 0.7	269 100.0
計	165 29.9	262 47.4	114 20.7	11 2.0	552 100.0

では「つきあっている」が61.2%で「あまりつきあっていない」が33.6%と多くなっている。先の就業形態でもこのグループのみが違う傾向をみせていたが、ここでも同様に子育てなど多忙な時期であるために、友人とのつきあいも稀薄になっていることが推測される。しかし2～20回生で「つきあっている」者が多いことを考えると、子育てが一段落してから、また大学時代の友人とのつきあいが復活することも考えられよう。

さらに「あなたにとって学生時代の友人との関係は、現在どのような意味をもっていますか。」という質問を行い、「1. とても重要であり、大事にしていきたい」（以下「重要」と略）「2. あまりウェイトをおいていないが、何らかの形でつき合いは続けていきたい」（以下「つき合いは続けたい」と略）「3. 学生時代の友人関係よりも、他の人間関係を大事にしたい」（以下「他の人間関係重視」と略）「4. その他」の4つの選択肢を示して回答を求めた。その結果を示したのが図表Ⅳ-17である。「とても重要」（61.6%）と「つき合いは続けたい」（32.7%）の割合を合わせると94.3%となり、回答者の大部分が大学時代

図表Ⅳ-17 友人関係の意味

N = 557

重要 343人 61.6%	つき合いは 続けたい 182人 32.7%	その他 11人 1.9%
		他の人間関係重視 21人 3.8%

の友人関係を重視したり、つながりを継続したいと感じているようである。

これを回生別にみると図表Ⅳ-18のようになる。これも先にみた友人関係の結果と同様に21～30回生のみ異なる傾向がみられ、「重要」よりもむしろ「つき合いは続けたい」がわずかに多くなっている。その他の回生、とくに2～10回生、31～42回生では「重要」が多く、6割強から7割が大学時代の友人関係を重視している。2～10回生は教育学科創設間もない頃の学生であり、また小人数であったため結びつきが強いと考えられる。また31～42回生では卒業直後から卒業後10年位の世代であるため、大学時代の人間関係がその後の人間関係のベースとして残っていると考えられる。

図表Ⅳ-18 友人関係の意味 (回生別)

単位 上段：人
下段：%

	重要	つき合 いは続 けたい	他の人 間関係 重視	その他	計
2-10回生	30 65.2	9 19.6	5 10.9	2 4.3	46 100.0
11-20回生	59 57.3	34 33.0	6 5.8	4 3.9	103 100.0
21-30回生	61 46.2	65 49.2	5 3.8	1 0.8	132 100.0
31-42回生	188 70.1	72 26.9	4 1.5	4 1.5	268 100.0
計	338 61.6	180 32.8	20 3.6	11 2.0	549 100.0

図表Ⅳ-19 幸福感

N = 556

たいへん 幸せだと思う 171人 30.8%	どちらかといえば 幸せだと思う 284人 51.1%	どちらとも いえない・ わからない 93人 16.7%
---------------------------------	-------------------------------------	---

どちらかといえば
不幸だと思う
3人
1.4%

6. 幸福感

「あなたは同年輩の女性と比べて幸せだと思いますか」という質問をした結果が図表Ⅳ-19である。「どちらかといえば幸せだと思う」者が51.1%と半分強を占め、「たいへん幸せだと思う」者もほぼ3割を占めている。幸せだと感じている者が8割強と多数を占めていることになり、同年代の女性に比べて幸福であると思っている者の比率がきわめて高い。なお、この結果については、回生による傾向の違いはみられない。

V. ライフコースの理想と現実

ここではさらに卒業生のライフコースについて、その考え方や実際のライフコースの選択などについてみてみたい。われわれはライフコースについて、4つの側面から質問を行った。それは①卒業生は大学時代にどのようなライフコースを望んでいたか、②そして今、実際にはどのようなコースをたどっているのか、③卒業生の母親はどのようなライフコースをたどっていたのか、④また若い世代にはどのようなコースを歩んでほしいと考えているか、の4つの側面である。具体的には次のような6つのライフコースのタイプを示し、回答を求めた。

1. 結婚しないで仕事をもち続ける
(「仕事中心型」)
2. 結婚や出産にかかわらず仕事をもち続ける
(「仕事・家庭両立型」)
3. 結婚や出産をきっかけに仕事をやめる
(「結婚・出産退職型」)
4. 結婚や出産をきっかけに仕事をやめるが、子どもが一定の年齢になったら再び仕事につく
(「退職再参入型」)
5. 仕事につかないで結婚する
(「家庭中心型」)
6. 仕事につかないで結婚し、子どもが一定の年齢になったら仕事につく
(「子育て後参入型」)

なお、以下では()内のように略記する。

1. 母親のライフコース

図表Ⅴ-1 母親のライフコース

N = 553

仕事・ 家庭両立型 103人 18.6%	結婚・ 出産退職型 136人 24.6%	退職 再参入型 81人 14.6%	家庭中心型 200人 36.2%	
仕事中心型 1人 0.2%			子育て後参入型 32人 5.8%	

図表V-2 母親のライフコース（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	計
2-10回生	1 2.3	5 11.4	4 9.1	0 0.0	33 74.9	1 2.3	44 100.0
11-20回生	0 0.0	11 10.9	16 15.8	7 6.9	63 62.4	4 4.0	101 100.0
21-30回生	0 0.0	36 27.1	34 25.6	16 12.0	43 32.3	4 3.0	133 100.0
31-42回生	0 0.0	49 18.4	81 30.3	54 20.2	60 22.5	23 8.6	267 100.0
計	1 0.2	101 18.5	135 24.8	77 14.1	199 36.5	32 5.9	545 100.0

まず、卒業生が大学に入学するまでに、どのような環境のもとで育ったかを知るため、卒業生の母親のライフコースを明らかにしておこう。図表V-1が回答者の母親のライフコースである。ここでは「家庭中心型」が最も多く36.2%を占めている。次いで「結婚・出産退職型」が24.6%で多いのに対し、「仕事・家庭両立型」も18.6%を占めていることは注目される。これを回生別に分析した結果が図表V-2である。最も卒業年次の早い2～10回生の母親では「家庭中心型」が74.9%であり最も多い。また「退職再参入型」がないことは注目に値する。さらに、21～30回生以降の母親のライフコースには、ライフコース選択の時代的变化がよみとれる。つまり「家庭中心型」が明らかに減少し、「結婚・出産退職型」「退職再参入型」が増加する傾向が示されている。

「仕事・家庭両立型」は21～30回生の母親にとくに多いことがわかる。

2. 大学時代に理想としていたライフコース

次に大学時代に理想としていたライフコースについて図表V-3によりみてみよう。「仕事・家庭両立型」が最も多く42.9

%を占めている。次いで「退職再参入型」が31.0%、「結婚・出産退職型」が18.0%であり、仕事に就かないコースを考えていた者は全体の1割に満たない。これを回生別に分析した結果が図表V-4である。31～42回生では他の回生に比べて「仕事・家庭両立型」が最も多く46.5%であり、「退職再参入型」を理想としていた者が少なくなっている。

3. 実際のライフコース

では卒業生がこれまでにたどった実際のライフコースはどのようなものであろうか。卒業生にこれまでのライフコース（未婚者は予想されるライフコース）についてたずねた結果を図表V-5に示した。この図からも明らかのように、回答者全体としては「結婚・出産退職型」「退職再参入

図表V-3 大学時代に理想としていたライフコース

N = 555

仕事・家庭両立型	結婚・ 出産退職型	退職再参入型	子育て後 参入型
238人 42.9%	100人 18.0%	172人 31.0%	6人 1.1%
仕事中心型 13人 2.3%		家庭中心型 26人 4.7%	

図表V-4 大学時代に理想としていたライフコース（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	計
2-10回生	2 4.5	17 38.7	7 15.9	14 31.9	2 4.5	2 4.5	44 100.0
11-20回生	2 2.0	37 36.6	17 16.8	35 34.7	9 8.9	1 1.0	101 100.0
21-30回生	5 3.8	53 39.8	24 18.0	44 33.1	4 3.0	3 2.3	133 100.0
31-42回生	4 1.5	125 46.5	52 19.3	77 28.6	11 4.1	0 0.0	269 100.0
計	13 2.4	232 42.3	100 18.3	170 31.1	26 4.8	6 1.1	547 100.0

図表V-5 実際のライフコース

N = 546

仕事・ 家庭両立型	結婚・ 出産退職型	退職再参入型	子育て後 参入型
154人 28.2%	163人 29.9%	163人 29.9%	21人 3.8%
仕事中心型 17人 3.1%		家庭中心型 28人 5.1%	

型」がそれぞれ29.9%、「仕事・家庭両立型」が28.2%を占めており、この3つのコースにはほぼ三分されている。全体的には「家庭中心型」「子育て後参入型」「仕事中心型」の比率はいずれも少ない。

これを回生別にみると図表V-6に明らかなように回生グループによって差がみられる。とくに31~42回生では「仕事

図表V-6 実際のライフコース（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	計
2-10回生	2 4.8	9 21.4	13 30.9	6 14.3	7 16.7	5 11.9	42 100.0
11-20回生	1 1.0	15 15.0	30 30.0	35 35.0	8 8.0	11 11.0	100 100.0
21-30回生	7 5.3	30 22.7	47 35.7	35 26.5	9 6.8	4 3.0	132 100.0
31-42回生	6 2.3	95 35.9	73 27.7	85 32.2	4 1.5	1 0.4	264 100.0
計	16 3.0	149 27.7	163 30.3	161 29.9	28 5.2	21 3.9	538 100.0

・家庭両立型」が35.9%もみられ、家庭と仕事の両立をはかっている者が多い点で、他の回生と異なる傾向があらわれている。

4. 若い人たちに期待するライフコース

卒業生のライフコースについての考え方をを知るために、卒業生がこれからの若い人たちにどのようなライフコースをとることを期待しているかについてもみてみよう。図表V-7にみられるように、「仕事・家庭両立型」を期待する者が最も多く、54.3%の者が期待している。次いで「退職再参入型」を期待する者が40.8%を占め、この2つのコースを合わせると95.1%と回答者の大部分を占める。「結婚・出産退職型」、「子育て後参入型」を期待する者はごく少数であり、「家庭中心型」を期待している者は全くいない。つまり回答

図表V-7 若い人たちに期待するライフコース

N = 519

仕事・家庭両立型 282人 54.3%	退職再参入型 212人 40.8%	子育て後 参入型 10人 1.9%
仕事中心型 3人 0.7%	結婚・ 出産退職型 12人 2.3%	

者のほとんどが、若い世代の人たちには何らかのかたちで仕事に関わってほしい、さらに、仕事のみでなく家庭と両立させてほしい、と思っているようである。

これを回生別に分析した結果を図表V-8に示した。回生グループによる差はほとんどなく、すべてのグループにおいて「仕事・家庭両立型」が最も多く、5割以上を占めている。実際のライフコースは回生によって異なる傾向があるものの、若い人たちに期待するコースが一致している点は興味深い。

5. ライフコース相互間の関連

では次に、母親のライフコースと卒業生が理想としていたライフコース、卒業生が実際にたどることになったライフコース、若い人たちに期待するライフコースの4つのライフコースがどのような関連をもっているのかについてみてみよう。

①母親のライフコースと大学時代に理想としていたライフコースの関連

まずはじめに、母親のライフコースと大学時代に理想としていたライフコースの関連をみてみよう。クロス集計結果は

図表V-8 若い人たちに期待するライフコース（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	子育て後参 入型	計
2-10回生	0 0.0	24 55.8	0 0.0	17 39.5	2 4.7	43 100.0
11-20回生	0 0.0	48 50.0	2 2.1	44 45.8	2 2.1	96 100.0
21-30回生	0 0.0	70 54.2	1 0.8	56 43.4	2 1.6	129 100.0
31-42回生	3 1.2	134 55.0	9 3.7	94 38.5	4 1.6	244 100.0
計	3 0.6	276 53.9	12 2.3	211 41.2	10 2.0	512 100.0

図表V-9に示したとおりである。母親が「仕事・家庭両立型」の場合、娘も同じく両立型を望んでいた者が6割と多くを占めている。このコース選択における母親と娘の一致度は高い。一方、母親が「家庭中心型」の場合、娘は「退職再参入型」が多く、やや家庭重視に傾く傾向がみられる。

母親と娘のライフコース選択の一致度は25.2%と必ずしも高くないが、母親のライフコースを一つのモデルとして参考にしながら、自分の理想のライフコースを描いていたのではないかと考えられる。

②母親のライフコースと実際のライフコースの関連

次に母親のライフコースと実際のライフコースとの間の関係を見るため、クロス集計結果を図表V-10に示した。「仕事・家庭両立型」については母親と娘の一致度が35.4%と他の型よりも高いが、母親と娘のコースの一致度は全体としては

21.8%にすぎない。しかし娘は母親よりもやや仕事志向が強いコースを選択している傾向があらわれている。母親が「退職再参入型」の場合、「仕事・家庭両立型」を選んだ者が47.4%とかなり高いことが注目される。

③大学時代に理想としていたライフコースと実際のライフコースの関連

では、本人が大学時代に理想としていたライフコースと実際のライフコースの関連についてもみてみよう。分析結果は図表V-11に示されている。理想の各コースを横にたどっていくと、最も%の高いセルはほぼ対角線上にならんでおり、41.4%の卒業生が大学時代に理想としていたライフコースを実際に歩んでいることがわかる。但しこの結果には未婚者の予想回答が含まれていることに注意する必要がある。

「仕事・家庭両立型」を理想としていた者のうち、4割強の者は現実も理想通りになっているが、28.3%は「退職再参入型」、23.2%は「結婚

図表V-9 母親のライフコースと大学時代に理想としていたライフコースの関連

単位 上段：人
下段：%

		理想のライフコース						
		仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	計
母親 の ライ フ コ ー ス	仕事中心型	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
	仕事・家庭 両立型	3 2.9	63 61.2	17 16.5	16 15.5	3 2.9	1 1.0	103 100.0
	結婚・出産 退職型	4 3.0	51 37.7	32 23.7	41 30.4	7 5.2	0 0.0	135 100.0
	退職 再参入型	3 3.7	40 49.4	9 11.1	28 34.6	1 1.2	0 0.0	81 100.0
	家庭中心型	3 1.5	67 33.7	38 19.1	72 36.2	15 7.5	4 2.0	199 100.0
	子育て後 参入型	0 0.0	14 43.8	4 12.5	13 40.6	0 0.0	1 3.1	32 100.0
	計	13 2.4	235 42.7	100 18.1	171 31.0	26 4.7	6 1.1	551 100.0

図表V-10 母親のライフコースと実際のライフコースの関連

単位 上段：人
下段：%

		実際のライフコース						計
		仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	
母親の ライフ コース	仕事中心型	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0
	仕事・家庭 両立型	3 3.0	35 35.4	25 25.3	30 30.3	3 3.0	3 3.0	99 100.0
	結婚・出産 退職型	5 3.7	39 28.9	41 30.4	42 31.0	4 3.0	4 3.0	135 100.0
	退職 再参入型	1 1.3	38 47.4	20 25.0	21 26.3	0 0.0	0 0.0	80 100.0
	家庭中心型	7 3.6	32 16.4	71 36.4	53 27.2	21 10.8	11 5.6	195 100.0
	子育て後 参入型	1 3.1	9 28.1	6 18.8	13 40.6	0 0.0	3 9.4	32 100.0
	計	17 3.1	153 28.2	163 30.1	160 29.5	28 5.2	21 3.9	542 100.0

・出産退職型」になっている。また、「結婚・出産退職型」を理想としていた者の2割近くと「退職再参入型」を理想としていた者の17.1%が、「仕事・家庭両立型」コースをとることになっている点は興味深い。

④実際のライフコースと若い人たちに期待するライフコースの関連

卒業生が実際にたどっているライフコースと卒業生が若い人たちに期待するライフコースの間の関連をみるため、クロス集計結果を図表V-12に示した。「仕事・家庭両立型」の卒業生の場合、自分自身と同じコースを若い人たちに期待している者の比率が76.8%ときわめて高く、「退職再参入型」の場合は半数近くの48.1%の者が自分と同じライフコースを若い人たちに期待している。全体的には「仕事・家庭両立型」か「退職再参入型」かのいずれかを期待する者の比率が大半を占めているが、「仕事中心型」「仕事・家庭両立型」

「退職再参入型」「家庭中心型」の卒業生は、どちらかといえば「仕事・家庭両立型」を期待している者の比率が高い。しかし「結婚・出産退職型」「子育て後参入型」の場合は、「退職再参入型」を期待する者が最も多くみられる。いずれにしろ仕事と家庭の関わりについて、実体験や現代の社会の動向をもとに表明された意見であると思われる。自分の生き方として、仕事よりも家庭を重視したライフコースを選択した者も、何らかの形で仕事に関わりをもつコースを期待していることは興味深い。

実際のライフコースと若い人たちに期待するライフコースのこのような関係は、母親のライフコースと実際のライフコースの関係と似た傾向がある。つまり母親よりも自分、自分よりも次世代にと、家庭だけでなく仕事も家庭もという人生を送ってほしいという期待が世代間で増幅されているように思われる。

図表V-11 大学時代に理想としていたライフコースと実際のライフコースの関連

単位 上段：人
下段：%

		実際のライフコース						計
		仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	家庭中心型	子育て後参 入型	
理想の ライフ コース	仕事中心型	2 16.7	4 33.3	2 16.7	3 25.0	0 0.0	1 8.3	12 100.0
	仕事・家庭 両立型	5 2.1	99 42.6	54 23.2	66 28.3	4 1.7	5 2.1	233 100.0
	結婚・出産 退職型	3 3.0	19 19.2	46 46.5	25 25.3	3 3.0	3 3.0	99 100.0
	退職 再参入型	6 3.5	29 17.1	58 34.1	65 38.2	8 4.7	4 2.4	170 100.0
	家庭中心型	0 0.0	2 8.0	3 12.0	4 16.0	11 44.0	5 20.0	25 100.0
	子育て後 参入型	0 0.0	1 16.7	0 0.0	0 0.0	2 33.3	3 50.0	6 100.0
	計	16 2.9	154 28.3	163 29.9	163 29.9	28 5.1	21 3.9	545 100.0

図表V-12 実際のライフコースと若い人たちに期待するライフコースの関連

単位 上段：人
下段：%

		若い人たちに期待するライフコース					計
		仕事中心型	仕事・家庭 両立型	結婚・出産 退職型	退職再参入 型	子育て後参 入型	
实际の ライフ コース	仕事中心型	0 0.0	7 50.0	0 0.0	6 42.9	1 7.1	14 100.0
	仕事・家庭 両立型	0 0.0	106 76.8	0 0.0	32 23.2	0 0.0	138 100.0
	結婚・出産 退職型	3 1.9	67 43.5	11 7.1	71 46.2	2 1.3	154 100.0
	退職 再参入型	0 0.0	82 51.9	0 0.0	76 48.1	0 0.0	158 100.0
	家庭中心型	0 0.0	13 46.4	1 3.6	11 39.3	3 10.7	28 100.0
	子育て後 参入型	0 0.0	5 25.0	0 0.0	12 60.0	3 15.0	20 100.0
	計	3 0.6	280 54.7	12 2.3	208 40.6	9 1.8	512 100.0

VI. 卒業生としての大学生生活の評価など

教育学科卒業生は、日本女子大学で学んだこと、日本女子大学を卒業したことをどのように考え、また現在の日本女子大学への入学については、どのようにとらえているのであろうか。さらに、後輩に対してはどのようなことを考えているのだろうか。ここでは自由回答の結果を中心に以下に概括してみよう。

1. 日本女子大学での学習・体験の意味（資料2参照）

「あなたは日本女子大学での学習や体験は、卒業後の生活にどんな意味をもっていると思いますか。」という質問に対する回答の内容をみると、以下のように分類できるように思われる。（詳しくは資料2を参照されたい。）

a. 自信・精神的な励み

1つには大学での学習や体験が自信・精神的な励みになったという点があげられている。自由回答の内容をみると、苦しい時にも日本女子大を卒業したという事実が自信につながり、「無形の『ゆとり』」として自分自身の中に存在しているというような記述が多くみられる。

b. 価値観・行動のベース

第2に、価値観・行動のベースになったという回答が非常に多く、目立っている。具体的には「女性としての生き方」「知的好奇心の強さ」「人間関係上の配慮」「創意工夫」「生涯学習」「社会の一員としての意識」などである。このように卒業後の生活における考え方の基盤となっているものを、大学時代に培ったという回答が多い。これはまさに創業者成瀬仁蔵の三大綱領「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」にもとづく教育の成果の一端を示しているように思われる。

c. 友人の影響

また友人の影響も多くあげられている。友人によって自分の世界が広がった、友人から刺激を受けたなどの回答が多い。先に現在の生活の部分で

もふれたように、大学時代の友人の存在は大きく、卒業後の人生においても、大きな意味をもっているようである。

d. 校風

校風をあげた回答も目立っている。具体的には「自由」「のびのびしている」などの回答が多い。また在学中よりも卒業して何年か後になって初めて、日本女子大学の良さを実感している者が多い傾向がみられ、これも一つの特徴として興味深い。

2. 日本女子大学を卒業したことに対する感想（資料3参照）

次に「あなたは日本女子大学を卒業したことを、今どのように感じていますか。【よかった】あるいは【よくなかった】と思うことなど、自由にお書き下さい。」という質問に対する回答をみてみよう。卒業生の回答を「よかった点」「よくなかった点」それぞれに分けてみると、以下のように分類できよう。（詳しくは資料3を参照されたい。）

【よかった点】

- a. 周囲の評価、ネームバリュー
- b. 学生が女子のみであること
- c. 友人・先輩
- d. 環境・校風
- e. 学習面

【よくなかった点】

- a. 学生が女子のみであること
- b. 環境・校風
- c. 学習面
- d. その他

【よかった点】

- a. 周囲の評価、ネームバリュー

これは前述の卒業したことの意味にも共通するが、日本女子大学卒ということに対する周囲の評価、そしてそれを励みや自信として生活していくことができるというものである。

b. 学生が女子のみであること

また女子大の良さについての回答も多い。具体的には「女性としての自覚」や「イニシアティブをとることができる」などである。

c. 友人・先輩

友人・先輩の良さを指摘する回答も少なくない。素晴らしい友人との出会いやその人々の生き方に良い影響を受けているという回答が多くあげられている。

d. 環境・校風

日本女子大学の校風についてよかったと思っている者も多い。ここであげられている校風としては、前述のものと同様、「自由」「のびのび」、また「先生方の情熱」などがあげられている。このように校風についての意見が多い点は、本学の特徴ともいえよう。

e. 学習面

学習面についての回答もある。資格取得、生涯教育への期待などがあげられている。

【よくなかった点】

次によくなかった点についてみてみよう。分類した項目をみるとよかった点と共通部分が多いことがわかる。同じ大学で学んでも個々人の大学観、期待や目的の違いによって、受けとり方もかなり異なるようである。

a. 学生が女子のみであること

女子のみでの大学生活、また女子大であることに関するデメリットについて多くの者が意見を述べている。「男性の友人や知人が少ない」「男性の考え方にふれることができない」「女子のみによる視野の狭さ、ネットワークの稀薄さ」など、社会に出てから女子のみの環境にいたことのデメリットを痛感した者が多いようである。

b. 環境・校風

環境・校風については、「あまい」「平均的すぎる」「刺激が少ない」などの点で、日本女子大学の環境が社会に出てからマイナスに作用したと考

えている者が少なからずいることがわかる。

c. 学習面

学習面についても環境や校風と同様の傾向がみられる。「専門的知識の獲得」「職業教育」などに力を入れてほしいという声も多い。

その他に「よいことはない」という厳しい意見や「社会に出てからは本人次第」という意見もあった。また、よかった点・よくなかった点、両方についてふれている者も多い。これらの意見をみると、よかったと考えるかよくなかったと考えるかは、卒業生の在学中の行動やその後の社会的経験に照らして評価されているようであり、きわめて個人差のあるものであると考えられる。

3. 子どもの日本女子大学入学への賛否とその理由（資料4参照）

次に「今あなたにお子さんがいると仮定して、そのお子さんの日本女子大学入学にあなたは賛成ですか、反対ですか。またその理由はなんですか。」という質問についての回答をみてみよう。

この質問については「子どもの意思を尊重する」という考えが圧倒的に多いと予想されたために、卒業生の「日本女子大学に対する評価」をとらえる上での一つのメルクマールとして回答を求めた。そのためあえて「どちらともいえない」「わからない」の選択肢を設けず、賛成・反対のいずれかで回答を求めることにした。

まず全体としての賛否をみると、「賛成」は40.3%、「どちらかといえば賛成」は36.3%で、この2つの数値を合わせると76.6%となり、8割近くの卒業生が子どもの日本女子大学への入学に賛成していることがわかる。また「どちらかといえば反対」が19.3%、「反対」が4.1%となっている。これを回生別にみたものが図表Ⅶ-1である。回生間で大きな差はみられないものの、新しい回生年次の卒業生ほど賛成の比率が高い傾向がみられる。

図表VI-1 子どもの日本女子大学入学への賛否（回生別）

単位 上段：人
下段：%

	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	計
2-10回生	14 31.1	16 35.5	12 26.7	3 6.7	45 100.0
11-20回生	35 36.8	32 33.7	22 23.2	6 6.3	95 100.0
21-30回生	53 42.4	43 34.4	22 17.6	7 5.6	125 100.0
31-42回生	107 42.3	97 38.3	44 17.4	5 2.0	253 100.0
計	209 40.3	188 36.3	100 19.3	21 4.1	518 100.0

日本女子大学への入学に対する意見が自分の大学生活の評価（満足度）とどのような関連をもつかをみると、両者の間には強い関連がみられる。図表VI-2、図表VI-3、図表VI-4に明らかのように、とくに「校風」「専攻の学問」「教授陣の教育指導」などソフトな面との関連が強い。これらの項目に関して満足度が高い者は、子どもにも同様の環境で学ばせたいと思っている傾向があり、不満度が高い者は、入学に対して反対の傾向が強い。一方、「施設・設備」「職員のサービス」などと入学への賛否との間の関連はあまりない。これらの結果から、大学選択には校風や学部・学科、指導態勢などが重要な基準となっており、卒業生が自分の子弟を本学に入れるか否かの判断に対する影響因となっているといえる。

では日本女子大学への入学の賛否の理由としては、どのような理由があげられているだろうか。自由回答の結果からは、賛成・反対それぞれの理由は以下のように分類できる。（詳しくは資料4を参照されたい。）

【賛成理由】

a. 校風

具体的には「精神的ゆとり」「堅実」「女子大の

図表VI-2 大学生生活の満足度（校風）と子どもの日本女子大学入学への賛否との関連

単位 上段：人
下段：%

		日本女子大学入学への賛否		
		賛成	反対	計
満足度（校風）	満足	323 87.3	47 12.7	370 100.0
	どちらともいえない	62 55.4	50 44.6	112 100.0
	不満	13 37.1	22 62.9	35 100.0
	計	398 77.0	119 23.0	517 100.0

中での活躍」「環境の良さ」「建学の精神」などに対し、肯定的な意見を持ち、そのような校風の日本女子大学で学ばせたいと思っている者が多い。

b. 信頼・安心感

「安心して教育をお任せできる大学だから」という回答に代表されるように、信頼・安心感を抱いているのが賛成理由となっている。

図表VI-3 大学生生活の満足度（専攻の学問）と子どもの日本女子大学入学への賛否との関連

単位 上段：人
下段：%

		日本女子大学入学への賛否		
		賛成	反対	計
満足度（専攻の学問）	満足	224 82.7	51 17.3	295 100.0
	どちらともいえない	90 78.9	24 21.1	114 100.0
	不満	62 57.9	45 42.1	107 100.0
	計	396 76.7	120 23.3	516 100.0

図表VI-4 大学生生活の満足度（教授陣の教育指導）と子どもの日本女子大学入学への賛否との関連

単位 上段：人
下段：%

		日本女子大学入学への賛否		
		賛成	反対	計
満足度 (教授陣の教育指導)	満足	249 84.4	46 15.6	295 100.0
	どちらとも いえない	107 69.0	48 31.0	155 100.0
	不満	44 62.0	27 38.0	71 100.0
	計	400 76.8	121 23.2	521 100.0

【反対理由】

a. 共学希望

これについては前述の「よくなかった」点と共通部分が多い。つまり具体的には「男女共学で多くの刺激を得てほしい」「現代の社会構造を考慮すると共学のほうが望ましい」などの回答があげられている。中には女子大の存在を疑問視する意見もあった。

b. カリキュラム

次に専門性やカリキュラムについての指摘があげられよう。「専門性の欠如」「職業教育の不足」などこれも前述の「よくなかった」点での指摘とほぼ同様である。このような反対理由をあげた卒業生の中には、子どもが社会に出て仕事をする上で役立つかどうかを考えている人もいるようである。

c. 校風

校風を反対理由としてあげた卒業生もみられる。具体的には「価値観の違い」「スケールが小さい」などである。

その他、娘には「親とは違うコースを」歩ませたいから、という回答もみられた。

4. 先輩へのアドバイス（資料5参照）

「最後に、人生の先輩として、現在の日本女子大学の学生にアドバイスしておきたいことがあれば、どんなことでも結構ですからお書きください。」という欄を設け回答を求めたところ、非常に多くの意見や期待が寄せられた。それらを分類すると以下ようになる。（詳しくは資料5を参照されたい。）

a. 先生方・友人との関係

まず、先生方・友人との出会いを大切に、そして良い関係を育み、社会に出てからの精神的励みにしてほしいという回答が多くみられた。

b. 経験

学生のうちに、さまざまな可能性にチャレンジしてほしいという期待が多く寄せられている。

c. 時間の過ごし方

卒業後、社会に出てから初めて、大学時代の自由時間の貴重さ・贅沢さに気づく者が多いようである。仕事を始めたり、育児に追われるようになり、その有り難さが実感できるのかも知れない。そのような想いから、後輩たちにも時間を有効に使うことをすすめる指摘が目立つ。

d. 勉強

これも時間の過ごし方と関連があるが、学生の内にやっておくべきこと、身につけておくべき知識、勉強のとりくみ方などについてのアドバイスが多い。

e. 大学教育の社会への還元

大学で得た知識や価値観を社会に還元してほしいという回答も多い。自分のためだけの勉強でなく、社会の一員として自覚してほしいという意識が強いようである。

f. 周囲を見る目の養成

常に周囲に気を配り、多面的に物事をとらえられるようになってほしいという希望も述べられている。

g. 日本女子大学の学生としての自覚

日本女子大学の学生ということを自覚し、誇り

をもって行動してほしいという指摘である。創業者成瀬仁蔵の三大綱領の理解と実践が求められている。

h. 人間形成

大学時代に自分自身をみつめ、自分らしい生き方を考えてほしいという人間形成に関わる回答も多い傾向がある。

i. 子育て

また母親としての後輩への期待もあげられる。育児に責任感をもって取り組んでほしいという回答が目立つ。

その他、先輩たちの活躍に注目してほしいという要望や、大学間の活発な交流などを期待するもの、大学への提言など、さまざまな意見がみられる。

VII. 調査結果のまとめ

以上、今回実施した教育学科卒業生の動向調査の結果を、主に単純集計と回生別のクロス表を中心にみてきた。以下ではこれまでに明らかにしてきた調査結果を、できるだけ簡潔にまとめておこう。

1. 回答者の属性

今回の調査の回答者には一般入試を経て入学してきた者が多く、7割を占めている（公立および共学校出身者が多い）。あとの3割は附属高校出身者である。

大学入学以前は東京、南関東、甲信越静など関東近県に住んでいた者が多い。現在も同じく関東周辺が多いが、地方から東京の大学に進学することによって、その後東京周辺で生活することになった者も多いようである。また回生年次が新しい者の中には、東京よりもむしろ南関東出身者が多い。

2. 大学生活の評価（満足度）

大学生活については、「友人関係」、「校風」について満足度が高くなっている。また大学時代

の思い出としては、当時楽しかったことよりもむしろシビアな体験のほうが印象に残っているようである。具体的には、卒業論文、教育実習などについての記述が多い。

3. 現在の生活状況

職業については、フルタイム勤務者が4割を占め、最も多い。フルタイムとパートタイムを合計すると58.2%であり、6割近い者が職業に就いている。「一般従業者として教育関係の職に就き、専門的・技術的な仕事をこなしている」という卒業生の一般的な像がイメージできよう。しかしこの就業形態や仕事の内容などについては回生間で差がみられる。

また既婚者は77.7%であり、大半が30歳までに結婚している。恋愛結婚のほうが多いものの、回生によっては見合い結婚のほうが多い回生もある。結婚に際しては、日本女子大学卒業生ということが有利にはたらいたと考えている者は多くはないが、見合いにおいては有利だったとみている者がかなりいる。

既婚者の84.5%が子どもをもち、人数は2人が多い。また回生年次が新しい世代ほど子どもの人数が少ない傾向がある。

社会活動については、趣味、学習、地域活動、社会奉仕などに関わっている者が多い。また地域活動においては、何らかの役員経験をもつ者が多く、卒業生の地域社会での活躍の一端がうかがえる。

大学時代の友人とはつきあっている者が多く、大切に思っているようである。また8割以上の者が同年輩の女性と比べて幸せだと思っている。

4. ライフコースの理想と現実

卒業生の母親は、「家庭中心型」が3人のうち1人を占めている。卒業生自身は、大学時代には全体的に仕事に就く生き方を理想としていたようだが、実際は家庭中心の生き方を選択している傾向がみられる。しかし若い世代では仕事中心の傾

向がより強い。また卒業生の多くは、若い人たちが仕事も家庭もという生き方を選択することを期待している。

さらに母親の生き方を選択することをおある程度モデルとしながらも、母親よりも仕事を重視する傾向がみられる。大学時代に考えていた理想のライフコースと実際のライフコースが一致する者は4割強みられ、若い人たちに対しては、自分の実際の体験を考慮した上で、何らかの形で仕事との関わりをもつ生き方を期待している傾向が強い。

5. 卒業生としての大学生生活の評価など

日本女子大学で学んだことに対しては、ポジティブな回答が多い。日本女子大学での大学生生活におけるさまざまな経験が現在精神的な励みとなっている。また先生や友人、大学の校風から受けた影響は大きく、人間形成のベースとなっているようにみえる。

学生が女子のみという環境は、リーダーシップの育成という点ではメリットとしてあげられるが、社会に出て仕事をもつとネットワークの狭さ、女性のみという環境の偏りなどを感じる者が少なくないようである。また学習面については、職業教育の必要性を指摘する者もいる。

このようなメリット・デメリットと関連して、子どもの日本女子大学入学に関する賛否とその理由にも、日本女子大学に対する評価がうかがわれる。入学に賛成という者は、その理由として、ゆとりある校風、信頼感などを上げている。一方、入学に反対の意見をもつ者は、共学希望、カリキュラム上の問題、よりスケールの大きい大学へ入れたいなどの意見をもっている。またこれらの回答は、自分自身の大学生生活の満足度によって左右されている傾向があるように思われる。

最後に後輩へのアドバイスを求めたところ、全体的に大学生生活の貴重さを痛感しているようで、ネットワークの獲得、時間の有効利用、社会の一員・また日本女子大学生としての自覚など、先輩としての貴重なアドバイスが寄せられた。

おわりに

以上、文学部教育学科全卒業生を対象として実施した質問紙調査の結果をもとに、卒業生の動向についての分析を試みた。43年という月日の中で同じキャンパスの同じ学科で学んだ者が大学生生活をどのように評価し、日本女子大学で学び卒業したことがその後の生活とどう関わっているのか、またそれらの回答は回生によってどんな違いがあるのかなどについて、おおまかな傾向を知ることができたといえよう。

本調査は郵送法による調査のため、回収率はあまり高くはなかったが、有効回答票における自由記述の回答率は極めて高く、卒業生の生の声として非常に貴重な資料を得ることができた。卒業生の意見や見解の中には、学科や大学の在り方を肯定するものばかりではなく、ネガティブな点や改善点などについても率直な意見やアドバイスが示されている。これらは教育学科や大学の将来を考えるためにも資料的な価値がある。より広い観点に立てば、今回の調査結果は、高等教育論、女子教育論、ライフコース論などの分野における事例的資料としても役立つだろう。なお、本稿では紙数の都合により調査結果のすべてについてふれることはできなかったが、今後機会があれば、卒業生の生の意見などについてさらに詳しい調査報告をまとめたいと考えている。

資料1 大学時代の思い出（自由回答）

Q5 学生時代の思い出として、今、あなたの心に最も強く印象に残っていることはどんなことですか。2つまで書いて下さい。

a. 友人関係

- ・「友人が日本中、いろいろなところででき大変良かった。寮生活での友人もあり友人関係がよい。」
- ・「講義を幅広く受けることでたくさんの友人が得られ、その中でも、一生付き合っていきたいと思う大切な友人に出会えたこと。悩みを自分のことのように聞いてくれたり、アドバイスしてくれたことは忘れられない。」
- ・「好きなこと、熱中していることは、それぞれ違うけれど、それを認めあつての友人関係。いろいろ話をしたり、きいたりできる友人ができました。」
- ・「同じ科で親友と呼べるような人とめぐりあえなかったこと。（自分の問題でもある）」

b. 授業

- ・「授業では（実習）特殊教育が一番心に残ります。女子の少年院の体験は幸せに暮らしてきた私には衝撃でした。自分の知らない世界に様々な人間模様があることを知りました。そこで働いていた先輩の姿にも心打たれました。」
- ・「心理学、哲学、教育学の授業をとおして今のものの考え方、とらえ方のベースづくりができたこと。」
- ・「ゼミを通してはじめて知った思考する事の楽しさ。」
- ・「専門の授業を通して学ぶことの楽しさを知ったこと。」
- ・「障害児教育の実習。たった1週間だったが、子供、強いては人間を見る目が変わったと思

う。自分の世界が広がった。」

- ・「…略…どの先生も話題が豊富で特に少人数の講義は楽しかった。」
- c. 教職課程・教育実習
 - ・「教育実習で素晴らしい子供たちにめぐりあえたこと。」
 - ・「2週間の教育実習。結局教師にはなりませんでしたが、教育という今まで受ける一方だった立場が逆転した、とても貴重な体験でした。」
 - ・「教職の体育の授業で創作ダンスの為暗くなるまでグループの仲間で練習したこと。」
 - ・「小学校教員免許取得のために、苦手なピアノのレッスンを毎日したこと。（つらかったが、思い出としては良い）」
 - ・「教育実習を経験。“教えること”の難しさ、要点のつかみ方、分かりやすい説明の仕方などどれほど大変なことか強く感じました。」

d. 卒論

- ・「卒業論文を一生懸命やってそれが一冊の本のようになってうれしかったこと。」
- ・「卒論の作成にあたり担当教授から文章の書き方のイ、ロ、ハから手ほどきを受けたこと。3日間、友人3人と泊まりこんで書き上げたこと。」
- ・「卒論作成中（共同研究）友人との触れ合い。子供達との触れ合い。」
- ・「卒論のテーマが自由に、自主的に決めることができ、自分なりに精一杯研究できた。」
- ・「卒論の作成（友人と共同で行った）4年間の学生生活の中で一番勉強したと自分で感じた。」
- ・「卒論を書くことで1つのテーマを長期にわたり学ぶことを体験できたこと。」

e. 学問の楽しさ

- ・「自分の好きな学問を見出すきっかけとなった本を読んだこと。」
- ・「自分の求めるままに勉学に集中できた。このことが何よりも有り難かった。」
- ・「受験のためではない学習をすることの楽しさを知ったこと。」

f. 先生との出会い・ふれあい

- ・「卒業式で学長が「いつでも大学にもどっていらっしゃい。」とおっしゃり、なんて心優しい学校なのだろうと、実感したこと。」
- ・「先生方が学生の人格を認めて下さり、対等の立場にたって話して下さったことに、入学した直後の強い印象として残っています。」
- ・「すぐれた教授、講師陣に出会い、興味ある課題に積極的に取り組めたこと。」
- ・「1. 大学という限られた場の中ではあったが、人生の先輩達の生きる姿勢が直接的に細やかに伝わる毎日を送ることができたこと。2. 教授陣、友人たちの多くが、傾聴する姿勢を持っており、一人の人間として尊重されることを実体験を通して学んだ。」
- ・「研究室に行けば、いつでも先生方と話ができて、将来に向かっての良いアドバイスがいただけた。」

g. クラブ・サークル

- ・「クラブ活動を通じて、人の生きざまの凝縮図を見ることができた。楽しかった。」

h. その他

①寮・下宿生活

- ・「地方出身なので、東京での生活（親の有難さを実感）」
- ・「親元を離れての一人生活で、人間が少し変わっていくのが自分自身でも分かっていった

日々が思い出されます。」

- ・「4年間の寮生活でお互いをさらけ出して影響し合い、生涯の友が得られたこと。」
- ・「4年間を学寮で過ごし、いろいろな考え方や人間に触れ、また規律と自由さを学んだこと。」

②旅行・留学

- ・「勉強するだけでなく、アルバイトやサークル活動等でたくさんの友人ができて、いろいろな地域を旅行したこと。」
- ・「卒業旅行で1か月ヨーロッパに行ったこと。」

③学生運動

- ・「ロックアウトがあり、自分はどう考えているのか必然的に見つめさせられたこと。」
- ・「60年安保（クラスの友人がデモに出かけたりして、政治に関心を持つ初めての経験だった。）」
- ・「大学立法反対で女子大創立以来の初のストライキにであった。授業以外で本音の部分で、友人や、教師と、討論会がもてた。」

④行事

- ・「とだえそうになった目白祭を手作りでやっていこうとみんなで実行委員になって成功させたこと。（'86目白祭）」
- ・「毎年の行事、特に記念講演などに伝統を感じたこと。」
- ・「毎年の成瀬先生の生誕記念講演。当時は眠くなることも多かったが、社会で活躍している先輩方のお話は興味深かった。時間が許せば、これからも行きたい。」

⑤カルチャーショック

- ・「入学式のとき、あまりに華やかで綺麗な人が多いので私の来る所ではなかったかなと戸惑ったこと。」

⑥ない

- ・「ひたすら真面目に通学し単位を修得することのみ。面白味に欠けた学生生活。」
- ・「なぜか部活もせず、寮の人たちとも親しくな

れずに非常に消極的なつまらない学生生活だった。」

- ・「思い出が非常に少ないということが最も強烈です。」
- ・「どんなに思い出しても何一つありません。」

資料2 日本女子大学での学習・体験の意味 (自由回答)

Q6 あなたは日本女子大学での学習や体験は、卒業後の生活にどんな意味をもっていると思いますか。

a. 自信・精神的な励み

- ・「論理的思考方法と物事を客観的に見る態度を身につけたので、新しい分野のことを勉強するのに抵抗なく取組める。向上心を常に持ち生涯学習を心掛けている。」
- ・「日本女子大学で学んだということが自分自身の誇りであり、常に心にある。」
- ・「自分に対する信頼、自信のようなものを与えてくれる。」
- ・「苦境に陥っても自分に誇りを持ち前進するエネルギー源になっています。」
- ・「無形の『ゆとり』として、かけがえのない意味をもっていると思います。」
- ・「いろいろな意味で「なつかしみ」を覚えるので、心のオアシス、よりどころになっている。」
- ・「たくさんの貴重な教えにより、人間的にたいへん成長させていただき、物事を以前よりはずっと深くとらえることができるようになった。また、優れた先輩の大勢いる、素晴らしい建学の精神の学校を卒業させていただいたことは大きな誇りでくじけそうな時の励みになっている。」

b. 価値観・行動のベース

- ・「女性の自立を積極的に考えていけるきっかけとなった。」
- ・「すべての生活の基盤となり子どもを育てる原動力となっている。」
- ・「自分の価値観の根幹を形造ってくれた、と思っています。」
- ・「「自立」「自己」ということを他の人より強く意識する傾向が見られる。何にでも関心を持ち、試そうとする。」
- ・「職場ですぐ実践に役立つ技術は少なかったが、基礎的な知識、物の見方、考え方は、自分の中で確立していたと思う。」
- ・「人とのつきあい方、配慮のしかたの大切さ」
- ・「その時々には意識していなくても判断・決断・行動の根底のところ脈打っているものがある。」
- ・「伝統ある学校を卒業することによって、学校に対する誇りを持たたと同時に自由な校風で育まれることによって自由な発想、考え方の基盤ができたと思う。」
- ・「私自身の常識や価値観が育成された場であり、私そのものの価値にもなっていると思う。」
- ・「何事にも、まじめに精一杯とりくもうとする考え方、姿勢は学生時代に培われたと思う。」
- ・「小さな力でもいつか社会に還元しなくてはという社会の中の自分を見つめること。」
- ・「自分で考え、行動、実践できる力を、自然に身につけられたと思います。」
- ・「社会に出てからの人間関係や、仕事上での自分の身のふりかたを、工夫し、考えられる力を得られた。」
- ・「先生方や友人たち、先輩たちとのあたたかいふれあいはその後の生活に「人間を信じる」ということを与えてくれたと思う。」
- ・「自分の生き方を、将来の展望をもって考えること、女性としての自立について考えるときの

基本になるものを、教わった。」

- ・「社会の中に溶け込み易く、人とうまく付き合っていける。1人で何でもしようとして積極的に動ける。機転をきかせられる。」
- ・「目的意識をもって学習することの意義を知り、生涯学習への意欲づけとなった。」
- ・「仕事を持っていないので、直接的なつながりはないと思うが、生涯教育をいつも考え、地域に属するよう努めているのは、やはり女子大での教育に因るものと思う。」

c. 友人の影響

- ・「数多くの、いろいろな個性をもつ友人とのふれあいがこれからの人生において貴重な宝物になったと思う。」
- ・「大学時代に得た友人とは今でも親しく付き合い合っていて、その友人がまた友人を呼び、自分の世界がいつも広がっていく。」
- ・「学生時代に築いた友達関係がとても深く、社会に出た今でも、良き遊び相手であり相談相手になっていてありがたいことだと思っています。」

d. 校風

- ・「学問についてつめこまれず自由だったこと…中略…興味(学問)をいろいろな方向に向けることができた要素だったと思う。」
- ・「在学中はさして感じなかったが、卒業し、いろいろな場面に出会う中で「生涯を学びの場として自分を育てていくこと」「女性であると同時に人間として自立すべきこと」を大切なことと思うようになった。考えてみると、これは正に女子大の教育方針そのものようだ。卒業してからやっと女子大の良さを気付いたように思う。その為、娘は中学から付属校に学ばせている。」
- ・「学生時代より教員を目指し、大学に教科教育

法など実際に役立つ講座が少ないのを不満に思っていたが、教員になって10年たつとそういうことは問題でなくなる。大学で自由な雰囲気のもとに学習内容を限定せず、いろいろな体験を持てたことは卒業後の財産になったと思う。」

e. なし

- ・「私の場合はまったく関係ありませんでした。何か一つ専門が身に付くよう、カリキュラムがちがっていたらと当時、思いました。総花的まるで教養学科のようでした。」
- ・「残念ながらあまりない。もっと職業の誇りにつながる資格をとれる学部、学科を選ぶべきだったと思う。未熟でした。」

資料3 日本女子大学を卒業したことに対する感想(自由回答)

Q16 あなたは日本女子大学を卒業したことを、今どのように感じていますか。「よかった」あるいは「よくなかった」と思うことなど、自由にお書き下さい。

【よかった点】

- a. 周囲の評価、ネームバリュー
- ・「社会で活躍していらっしゃる先輩など多く、同じ女子大を卒業できた者として誇りに思う。」
- ・「一般社会における日本女子大の地位はかなり高いものがあり、在学中よりもむしろ卒業後にその自覚を感じるが多くなった。卒業生としてその言動に、より注意を払うようにしている。」
- ・「私は日本女子大卒であることを誇りに思っている。同期の本⁶女卒の子や先輩の働きぶりも

非常に素晴らしいと思う。世の中から評価されていると感じる。在学中よりも社会に出てから、大学の大きさを感している。」

b. 学生が女子のみであること

- ・「高校が共学の進学校だったため、自分が女性であるすばらしさに気づくことはなかったが、女子大での授業でちょっとした気づかいについての話を聞き、女性としての自分を見つめ直すことができた点はよかった。」
- ・「女性が社会進出していくはじめての時代に「女子の教育とは」ということを考え続けてきた大学に学んで、社会に出る前に予習ができたこと。女子大の先生方ご自身が女子大を愛し、特に、教育(=心理、教育)学科の先生方は学生を育てようという熱意がとてもおありだったこと。」
- ・「女であるということで、男の人にゆずったり頼ったりすることが、あたりまえだったが(中学まで)女子大に入ったことでかたくなにもめんどろなこともやっていたかなくてはならなかったことが、よかったと思う。気負うわけではなく、私にもやれそうだからやってみようと思えるようになったのは、女子大に在学したからだと思う。」

c. 友人・先輩

- ・「就職している間、女子大出身者の後輩も何人か同じ職場に入り、女子大出身者は理解力があり社会性があるといわれ、優秀な人達が後に続いて母校の評判が上がったと思った。…略…」
- ・「多くの友人を得ることができて良かった。いろいろな分野で活躍している先輩が多く、いろいろな場で女子大卒という事で有利なことがあるように思う。」
- ・「それぞれにしっかりした考えを持った(持ちつつあった)個性的、魅力的な女性達と出会う

ことができた。」

- ・「とてもよかった。卒論の調査研究の折、全く知らなかった大先輩に大変お世話になった。…中略…“又あなたたちも同じように、機会があったら後輩の力になってあげれば、私はそれで充分ですよ”と言われた。その生き方は、私の今のポリシーになっている。」
- ・「女性として大変魅力的に年齢を重ねられた先生方や、自分の考えをしっかり持った友人たちと知りあうことができた4年間を私はとても貴重だったと思っています。」
- ・「何かと先輩方に素晴らしい生き方をしている方が多く、また親身になって下さる。また、知らず知らずのうちに“しつけ”または常識といわれるものが身につけている気がする。」
- ・「同じような価値観をもった友人たちと出会い、いろいろな経験ができたことはよかったと思う。今も、日本女子大学で学んだことが私の誇りであり、自分に自信を持っている。」
- ・「一生つきあえるような友人との出会いがあったことでよかったと思う。離れていても価値観が同じ人が多いのですぐに悩みが伝わり、相談しやすい。」
- ・「生き活きた本来の女性像を見たような気がします。学士編入したので、前の共学校と比べ自分のやりたいことがはっきりしている女性たちであったと思います。社会の中でこうした方々のがんばりのおかげでたくさんの方が女性に開かれてきたという事を実際この目で見たことが自信となっているかもしれません。」
- ・「PTA活動をしていて一番感じたことは日本女子大の卒業生は(私の知っている)気がきいていて仕事をよくこなし、全体的によく考えて行動する人が多いということです。これはやはり教育内容の良さから来るのではないかと最近思っているところです。」

d. 環境・校風

- ・「活動的でのびのびした校風、(一部かもしれませんが)ある程度の常識をもった人間関係が保てたということがよかったと思う。」
- ・「大変良かった。建学の精神・校風をととても誇りに思っている。「私達が受けた“恵まれた”良質の教育を、卒業したこれからは社会に何らかの形で還元していきたい」ということが(青木生子先生のおことばから影響された)自分の職業観の根底にある。また、このような本当にまじめな話を学生時代の友とは本音で話せる。」
- ・「卒業をしてから、日本女子大学に10年間学んだことをとても誇りに思っている。社会に出ると、校風をまたその校風が身体にしみついていることをとても感じる。女性として、最高の教育を受けたと思う。女性だからと、卑下するわけでもなく、女性でありながら、中性的な人間的な教育を受けてきた。また、お互いを尊重、認めること、など沢山のことを学んだと思う。」
- ・「自由な雰囲気の中で落ち着いて勉強できたこと。また、しっかりとした考えをもった人たちが多くその人たちと友人になれたということがよかったと思う。」
- ・「校風がとても良く、楽しい学生生活を送ることができました。勉学だけでなく、全国から集まった友人と話し合ったことなど、私にとって、大変貴重な4年間でした。日本女子大学で学んだことは、私にとってほこりです。」
- ・「日本女子大は私にとってとても温かい所でした。厳しい社会に出、昔とはずい分考え方なども変わってきた現在ですが、過去の一時期、あのようなゆったりとした温かい雰囲気の中で勉強ができたことは、とても幸せな思い出となっています。」
- ・「(先生達が)特に女性の先生が、私たちを育

てようという情熱がととてもあったと思います。」

- ・「大学院在学時、既に、子どもがいたが、先生はじめ友人とも理解があり、協力してくれたことなど、女性の出産や結婚に対して、理解があり、そのことを職業や勉学活動と切りはなしたものと考えない気風。」

e. 学習面

- ・「小学校の教員の資格をとりたくて入学したので資格がとれてよかったです。ただし教員として役立っていることは教員になって子どもと対しながら身につけていったことが多いです。学生時代は単位をとるために授業を受けていたように思います。音楽(ピアノ)の実習は厳しかったが身につきました。特殊教育(少年院の実習、辺地教育)が特に印象に残っています。穏やかで心やさしい友達が多く今もつき合っています。」
- ・「理論的にものごとを考える力や発言する能力が身についた。大学を卒業する女性が全女性の5%くらいの時代に大学を卒業できたことはありがたい事と思う。」
- ・「生涯教育の場としてまた大学に戻ることができる、という期待がある。卒業生の組織化がしっかりできている。」
- ・「…略…教育学科としては「人間」ということを視点においた上での指導でよかったと思う。」

【よくなかった点】

- a. 学生が女子のみであること
 - ・「共学でないので学生時代に男性の友人を作るきっかけが少なかったこと。」
 - ・「授業やゼミの中での同年代の男子学生の考え方、見方に触れる機会があればよかった。」
 - ・「女の子だけの4年間というのはとても楽し

- かったが、社会性の欠落した4年間であった。」
- ・「高校まで共学だったので女子だけの生活があまり好きになれなかった。女子だけというのは自然でないと思う。」
 - ・「卒業生として働く仲間が少ない。共学だと、男性が多分野で生涯活躍しており、情報・協力も得やすく、そんな時、女子大で失敗したと思います。」
 - ・「附属からであったため、女性だけの友人関係（世界）からくる視野の狭さ、訓練されていない面が、卒業後ははっきりわかり、社会に出てその部分での勉強に使うエネルギーは大きかったと思う。」

b. 環境・校風

- ・「幼少からの一貫教育にも、良い点はあるとは思いますが、学生はなまぬるいお湯の中で甘やかされているように思えます。互いに刺激し合い、励みになるような風潮ができれば、社会にもっと役に立つ人間を送り出すこともできると思います。」
- ・「あまり苦勞を知らない幸せな4年間だった。反面、もっと物事をとことん考えて将来のことを考えるべきだったとも思う。」
- ・「教員が“女子”大学ということを意識しすぎていたことが（－）だった。社会人になってからは、そのことは忘れて広い視野を持つことができた。娘には女子大をすすめる気持は、持てなかった。」
- ・「もう少し、いろいろな種類の人と接することができればよかったと思う。（女子大は、年齢、性別（もちろん）、家柄…など均一すぎるのでは…）」
- ・「縦のつながりがとても薄く、卒論にしても、ゼミにしてももっと先輩の手伝いアドバイスがある方がよかった。公務員になるなど本気で一生仕事をする気である人は少ないこと。」

- ・「温室のようであって、精神的にもっと刺激が欲しかった。」
- ・「良い先生も多く、また、良くない教師も多かった。附属から一貫した“精神”というものが、（少し）欠けていると思う。長年お世話になりましたが、女子大生としてのアイデンティティは持てなかった。」
- ・「自分の勉強不足はもちろんありますが、もっと、専門の勉強のできる雰囲気はほしかったと思う。のんびりした校風に思えたが、どっぴりつかってしまい、各人の個性や、学校自体の個性が乏しいように思える。女子大卒業ということで、世間知らずのお嬢さんと思われるのが辛いです。」

c. 学習面

- ・「…略…資格をとりたいたっていたので、その幅が狭いのが残念だった。ゼミの人数が多く、内容もうすく、交流もあまりできず良くなかった。」
- ・「今の仕事からいえば、もっと専門的な勉強ができる環境であってほしかった。もっと、卒業後のこと特に、職業について、目をむけた教育が行われるべきであったと思う。」
- ・「私が学生の頃は学習内容の間口が広く、特別何を専門に学んだか不明でした。仕事に就いてその事がはっきりとわかり、苦勞しました。専門分野をもっと深くゼミ形式で学習できたらよいと思います。」
- ・「授業があまりよくなかった。教材を使う、身近なエピソードを加える、生徒の理解度をまめにチェックするなどやる気をおこさせてほしい。先生方が研究していることを、わかりやすく、もっと興味を持つように指導してほしい。また、ある面での評価の厳しさは必要だと思う。また、空き時間に先生の部屋をたずねた時など、もっと親身になってほしいと思った。」

(もちろん数少ないたいへんよい先生もいました)」

- ・「学生生活が不満足であった。授業以外の学生同士、学生と教授による活発な研究活動が欲しかった。大学の先生が少々忙しいように思われます。」

d. その他

- ・「特に良いことなし。学問研究の場として先生にも、生徒にも、自覚なし。先生は自分の仕事のみに関心。お嬢様の教養、レッテルづくりの場。」
- ・「社会に出て、一度職に就いてからは、本人の能力・努力によるので、どこの大学を卒業しようともあまり関係ない。日本女子大を卒業したことを意識したことがあまりない。」

【よかった点・よくなかった点】

- ・「教育学科という事も人間に関する学習が出来、全人教育が女子大の特徴だと思う。反面、職業人としての備え、指導が稀薄だったように思う。」
- ・「のんびりと周りに流されず、マイペースで大学生活を送れた事はよかったと思う反面、共学校へ行ってもっといろいろな面で刺激を受けた方がよかったかなとも思っています。」
- ・「・小人数で授業が受けられたことはよかった。・全国から学生が集まってきた。・特別教養講座などで(もちろん学内のスタッフ)著名な先生の講義を聞くことができた。ネットワークの広さか?・温室であったという気がする。社会に出たらいかに厳しいかということも教えてもらえなかった。社会から隔離された世界であった。」
- ・「本校の良さは、女子大特有の、“のんびり”しているところだと思う。ただ、共学にあるような“活気”があればもっと良くなるの」と思

う。」

- ・「私自身については「よかった」とも「よくなかった」ともいえない。ただ、日本女子大学卒の学歴に対する世間の反応は様々である。「お嬢様」「上品」「そこそこ堅い」「世間知らず・苦労知らず」「根性がない」etc… “縁談には有利、就職には不利”
- ・「よかったと思うのは自治の大学という感じで、商業的でなかったこと。校風がない、というのが校風という気がします。シンプルで学び舎というイメージです。型にはめられず、のびのび過ごせたのは良かったのですが、やはり女子大なので、ダイナミックさに欠けた気がします。もっといろいろな試みや受け入れをして活気や広がりがあったら良かったと思います。」
- ・「様々な考え方の女性に出会えてよかった。但し、全体的におっとりした感じの方が、多くて、友人としては申し分ないが、ライバルとしては、ハングリー精神に欠けている気がした。」

資料4 子どもの日本女子大学入学への賛否とその理由(自由回答)

- Q17 今あなたにお子さんがいると仮定して、そのお子さんの日本女子大学入学にあなたは賛成ですか、反対ですか。またその理由はなんですか。

【賛成】

a. 校風

- ・「今年、豊明小学校を受験します。女子大学の成瀬先生の教育方針、校風が単なる女子大学とはちがうスケールの大きさを感じ是非入学させたい。」
- ・「校風がいいですし、学内のふん囲気もよかったですし、又、先生方が生徒のことをいつもよ

- く考えて下さっていると感じてましたので。」
- ・「偏った思想を押しつけないし、自由でしっかりとした意思を持った、誠実な人の雰囲気があるから。」
 - ・「学生時代、精神的なゆとりを持つことができた。」
 - ・「おっとりした人柄、バランス感覚、他者への関心の重さ、或いは思いやりなどが残っている。こうしたことは生きる上で大切なので。」
 - ・「質実剛健な校風で、地味だが堅実な人々が多く、その4年間に得ることが多い。」
 - ・「自立した女性の生き方を教育していただける学校と信じております。少々硬い考え方ですがいいかげんな時代ですからがんこが大切でしょう。」
 - ・「教授陣の質が素晴らしいことと、努力しだいでいろいろな分野の力を広めることができるから。」
 - ・「私の母も日本女子大の卒業生で何かと話も合うし、話題もふえる。又、私自身、日本女子大が好きだから。」
 - ・「代々女の子は日本女子大の家系なので。」
 - ・「自分が受けてきた教育に誇りがあるし、自信があるし、幸せだと思うから、女の子がいたら絶対に入学させたい。」
 - ・「歴史はあるが、堅苦しくない校風、人間層の厚さ、女子大でありながら活気があるので。」
 - ・「地に足のついた教育があり、また卒業後もつながりをもてるため。」
 - ・「知識の習得だけではないことです。雰囲気の中にしらずに身につくものがあると思います。」
 - ・「ぜひ自由な学生生活と規律を守るしくみをおしえたい。」
 - ・「伝統があるし、校風に落ち着いたよいものが感じられるから。」
 - ・「卒業後10年以上経ち、様々な活動をしてきた中で、リーダーになって引っぱって行ってくれるのは、女子大とか短大でイニシアチブをとっていた女性に多い。共学の中で、男子の後ろにいるより女子大で思いきり活動してほしい。」
 - ・「真面目に学生生活を過ごし、その後の生活の目標、姿勢を学ぶことのできる環境と意欲が学校全体にあると思われるから。」
 - ・「日本女子大学の校風もさることながら卒業生田校舎を訪れてみて自然の中の大変良い環境に感動したから。」
 - ・「学内の環境が非常に良いと思う。しっかりした家庭のしつけをうけた良識ある学友やサポートする教授など。」
 - ・「創立者の考えが立派でその伝統を受け継いでいるので。」
 - ・「主人の姉も妹も豊明幼稚園からずっとお世話になりました。(主人も豊明幼稚園でした)自分自身も日本女子大は好きです。」
 - ・「今、現在、中2の女の子がいます。公立中学校に通っていますが、言葉使いその他もっと潤いのある豊かな人間になってもらいたいと思います。日本女子大はその様な雰囲気を身に付けるにはピッタリです。」
 - ・「男女共学とは異なり、女性が伸び伸びと自分を主張できることは、大変よいことだと思いますし、一時期そういう経験をするのは貴重なことだと思います。」
 - ・「現在、高3に在学している。本人の性格にもあっていた様だし何より良い友情をつかんで欲しかった。」
 - ・「自分の母校というのではなく「女子大」であるからというのが賛成理由。女子だけの方が何でも男性に頼らず？自分でする態度、考え方が身につくと考えるから。実際には、子供の意思にまかせる。」

b. 信頼・安心感

- ・「自由な校風が気に入っている。教育方法や、良きアドバイザーとなって下さる先生方に信頼があるから。」
- ・「いくらかでも自分で分かっている学校であるという安心感が第一です。そして私が日本女子大学を誇りに思っていること、大好きな学校であることが理由です。」
- ・「安心して教育をお任せできる大学だから。」
- ・「やはり、子供にとって周りの環境は大切だと思うし、自分も良かったと思うので安心できる。」

c. その他

- ・「親子で同じ大学というのに懂れます。女子大の伝統と良い教育をうけついでほしい。」

【反対】

a. 共学希望

- ・「女性ばかりの環境では視野が狭くなる。特に年齢が低い時期には性別も家庭環境も様々な人といっしょに育つべきである。」
- ・「公立・男女共学で、様々な人間・環境の中でもまれ、自分の人生目標を見つけて欲しい。」
- ・「“男女平等” という名のもとに人間のふれあいを自由に伸ばしてあげたい。」
- ・「社会に出て職業に就く女性が増えている。企業では男性と共に仕事をする。その準備を学生のうちに体験させたい。」
- ・「男性中心の社会構造が現実である以上、共学の学生生活を送ってもらいたい。」
- ・「これからの時代、男女共学がそれぞれの多くの人達の性格を知り合えて良いし、啓発し合えると思う。」
- ・「現在の社会では共学のほうが良いと思う。」
- ・「女子大以外の世界で男女対等意識を真からつ

けてほしい。もっと厳しい世界があることを人間として知ってほしいので。」

- ・「集団には男性・女性がいてこそ自然な形とと思います。女子大の存在は不自然に思います。」
- ・「男女共学の中でそれぞれの特性を見つけさせたいので。」

b. カリキュラム

- ・「現代社会において女子だけの学校とは、メリットが少ない。たまたま勉強したいことを専門とする教授がいればよいが、女子大は専門性に乏しいと思う。」
- ・「私自身が、社会に出て働いた経験からいえば、第一線で働くためには日本女子大だけでは不十分であるから。」
- ・「学生を甘やかして、どんな成績でも単位を与えて、卒業できるようにしている。」
- ・「もっと、しっかりとした資格や『職業観』を与えてくれる所にいれたい。」
- ・「研究者を育てるだけのシステムに乏しい。」
- ・「自主独立の精神に欠け、真の勉学をする場ではないと思う。」
- ・「専門的な研究や技術が身につくような教授陣のそろった大学へ入学してほしい。」
- ・「…略…もう少し、もまれるような、苦勞をするような、本当に勉学にうちこめるようなところが、いいと思う。」

c. 校風

- ・「自分の価値観（それに影響されるであろう子供の価値観）が女子大に通う方々との価値観と合わないだろうから。」
- ・「もっとスケールの大きい大学に入学してほしいと思うので。」
- ・「他力本願の人が多く、大学というより、花嫁学校のようなだから。」
- ・「どんなに自己を見つめていても楽しく有意義

に学生時代を過すには限度がある。もっといきいきとしたものを大学全体に求む。」

- ・「知的好奇心が十分発揮できるとはあまり思えない。」

d. その他

- ・「親とは違うコースをたどってほしい。」

資料5 後輩へのアドバイス（自由回答）

Q18 最後に、人生の先輩として、現在の日本女子大学の学生にアドバイスしておきたいことがあれば、どんなことでも結構ですからお書き下さい。

a. 先生方・友人との関係

- ・「先生方との（友人とも）コネクションはいろいろなかたちで持ち続けていくこと。人生何といても人間関係や network で終始することが非常に多いです。」
- ・「大学生生活で勉強することも大事な学生の義務、それと同じ位、友人を持つこと、多勢の友人は生涯を豊かにすると思う。」
- ・「教授や教職員の方々に積極的にアプローチして、学習面にかぎらず、生活面でも相談できるような関係を作っておくとよいと思います。」
- ・「先輩たちの大きな業績や社会活動にもっと目を向けてほしい。」
- ・「一生つきあえそうな友人が一人でも多くできるように、つきあいを深めて行ってほしいです。」
- ・「目的意識を持って学習してほしい。又、専門的仕事についてきたとき、相談できる先生を作っておくとよいと思います。」

b. 経験

- ・「とにかく経験が大切なので、何でもやってみるとよいと思う。そして、いろいろな人間とつきあっていける心の広さを身につけたい。」
- ・「自分だけの自由になる時間が24時間あるのは、大学時代だけですから、どうぞ、いろいろなことにチャレンジして、人間性を高め、決して、快樂だけの生活には走らないでもらいたい。忙しい生活を送っていただきたいです。」
- ・「学生時代の若さ、体力、気力をもってしかできなかったことがたくさんある（今から思えば）、何でも良いからうちこんでみるとよいと思う。後で本当に自信となって残るものです。」
- ・「積極的に、いろいろなことにチャレンジしてほしい、早くから、自分の進路を考えて、目的を持って学問することも大事ですが、可能性がたくさんあるうちに（若いうちに）、多くの経験をして、その中から、“自分”をみつけてほしいと思います。」
- ・「興味ある学問分野を早目に見つけること。遊び、社会活動、習いごと、アルバイト等、できるだけたくさんのかじってみること。人生の岐路において、経験が道を啓いてくれるはず。」
- ・「女子大の殻には閉じ込められず、もっと外に出ていろいろな体験をしてほしい。」
- ・「何事でもいいから学生時代にこれはやった、やり通したというものを一つでも持ってほしい。また勉学も大切だと思います。」

c. 時間の過ごし方

- ・「学生時代は、すべての時間が自分のためです。その時間を有効に使って下さい。」
- ・「日本女子大学には優秀な教授の方がいっぱいいらっしゃいます。そんな中で「勉強」ができるのは今だけです。遊ぶことも楽しい時期です

が、どうぞ悔いのないよう知識を身につけて下さい。又何かやりたいと思っていることがあったら、学生時代に始めることをおすすめします。専門学校に通うなり（時間が許せばですが）おけいこ事をするなり、結婚したときにきっとやっていて良かったとお思いになります。

- ・「社会に出てからの生き方、まずそこでその人の人生は、大きく変わります。が、その生き方も、学生時代における暮らし方や、考え方に基づいて、生まれたものです。何をやるにしても一生懸命、とりくむことが、どんな時にも大切だと思います。」
- ・「学生生活を充実させるのも自分、つまらなくさせるのも自分です。あの時の私は目標を失ってしまっただけ何もせず、4年間をすごしてしまいました。ただ空白の4年間ではあったけれど、その空白が次への飛躍の布石ともなりました。今、自分は何をしたいのか、将来自分は、どうなりたいのか追求して下さい。…略…」
- ・「大学での4年間というのは、人生の中で最も時間を自分の自由に扱うことができるときだと思います。長い人生が充実するための基礎固めをしながら、20年、30年先の自分はどうしたいのかをさぐってほしいものです。」
- ・「時間を自分のためだけに使えるのは学生の間だけです。時間を有意義に使って下さい。学生時代の友人を大切に！」
- ・「夏休みに、旅行もよいが、近くの病院や、老人ホームで、ボランティアになって、自分の出来ることをして、他人の役に立ってほしい、と思います。」
- ・「目的（何の職につきたいか）を持って学習するもよし。通過機関として、所属しつつ他のことに没頭するもよし。要は、そこで、いかに自分自身を開拓し、発展させられるか否かだと思います。若い時を大切に、自分自身も大切に。」

d. 勉強

- ・「学生時代に勉強しておかないと、卒業してからは、なかなかできない。また、良い友を見つけ、競い合って伸びてほしい。」
- ・「自分のテーマをしぼってそれに向かって徹底的に学んでほしいと思います。社会にその能力を発揮して行ってほしいと念じております。」
- ・「学生時代は社会人となるための最終準備期間、そのために最低限必要なことは学んで欲しい。“自分のコトバで話せる人にナレ”…新聞、本は今のうちにたくさん読み、自分で考え話せるように。」
- ・「大学での授業は自分でするもの、授業を受けるだけでなく、問題意識を持って勉強して欲しい。」
- ・「学生時代に、体系的なもののとらえ方、全体観をつかむこと、柔軟性をもった考え方をしっかり身につけてほしい。」
- ・「問題意識が持てるような学習をしてほしい。でも学習の基礎はしっかり身につけて、そしてさらに考え行動する力をつけて卒業していかれたらと思います。」
- ・「専門職、研究職につきたいのであれば、少なくとも修士レベルで学校を越えての、学会活動に参加することが望ましい。」
- ・「勉強に余裕がありましたら、是非、専門外の授業も履修してみてください。今、必要がなく思えても、社会に出てから、役に立つことも多いものです。」
- ・「女子大に限らずいえることだが、何となく身につけた検定や資格ではいけない。一生のプランに合わせた生き方を考え、それに向けた専門性を着々と身につける4年間にしてほしい。」
- ・「大学生生活の4年間は、とっても有意義なものです。単位さえとれば…と思って、講義に出ていたのが、くやまれます。在学中の皆さんには、そうでなくて、たとえば、ゼミなどに、

みっちり力を注いで、自分の考えをまとめる力、他人からビシバシ批判され、それを受ける力、そして、なお、前進しようとする意欲を、つちかう場としてほしいと思います。…略…」

- ・「キャンパスが目白から離れ、自然の残る生田に移ったので、どうか伸び伸びと人間について研究してほしい。人間を研究するなら尚のこと自然との関わりを大切にゆとりある勉学をしてほしい。」
- ・「なるべく授業に出席してください。“代返”の人がけっこういましたが、先生方の講義は心の財産になります。一般教養でも、私は今でも克明に覚えている授業がけっこうあります。そういうものを、自分から、きりすてるようなもったいないことはしないでください。卒業したらなかなかとりもどせないものが多いと思います。」

e. 社会への還元

- ・「若い時にしかできないことを、情熱をもってやって下さい。そして卒業したら、それらを何らかの形で社会に役立てて下さい。」
- ・「主人の仕事で海外赴任した折、現地の中産階級の夫人の方々は皆、仕事かボランティアをしていました。彼らは、「大学教育を受けた者は、そこで得た物を社会に還元しなくてはならない」と考えています。日本ではまだまだ生活に困らないならば、働かなくても良い、と考えているようですが、自分の人生を意味ある大切なものにするためにも大学を履歴の飾りにしないで下さい。」
- ・「今の学生は、とても世渡りがうまく、あまり、苦勞のない人生を選択していると思う。1人の人間として、社会に何かわずかなことでも参加できるよう、学生の時から自覚してほしい。」
- ・「ぜひみなさんのすばらしい力を自分だけで一

人じめせずに社会のために働かせてほしいです。」

- ・「今後は、女性だからという特別な意識は、（社会に出た時、甘えとしかとられないので）（成瀬先生のモットーに、はずれるかもしれないが）すて、自分が一人でも生きていける為の長期的展望をもち、どんどん社会で活躍してもらいたいと思います。」
- ・「四年制大学で身につく知識は大したものではないかも知れませんが、社会に出てそれを伸ばしていくのは貴女自身です。自信と信念を持ち、世の中の荒波に負けずにプライドを持って生きて下さい。」

f. 周囲を見る目の養成

- ・「世の中には、あなた方のように恵まれた環境に育った人ばかりではないことにはっきり気付いて下さい。女子大での価値規準（特に金銭面）が、日本の一般の価値規準とほんとうに同じかどうか、肌で実感しましょう。」
- ・「4年間の学生生活を通し人を見る目を養って欲しいです。ほんとうの人間のよさを見ぬける人が育って欲しいです。女子大の場合、良い環境で育ってきている人が多いと思うので、地位や見かけでなく人間としての一人一人の価値に気づける人になって欲しいです。願わくばどちらかといえば社会的弱者に気が配れる人になってほしいと思っています。」
- ・「弾力的なものの見方と熱のある生き方をそして他者の意見を噛みくだいて聞きとるゆとりを。今周囲にあるものを否定せず積極的にそれらに関わることで自信が持てるのでは。」
- ・「物事を多面的にみる目を持つことと自分の決断、実行したこと（すること）に義務責任のあることを忘れずに、学生時代を充実させて生きてほしいと思う。」
- ・「自分の大学の中だけで、勉強、活動をしてい

ないでいるんな他大学の学生と、交流したり、聴講に行ったりして、たくさんの人と接し、さまざま考え、いろんな人間のいることを、少しでも多く見つけ、豊かな人間になってほしい。」

g. 日本女子大学の学生としての自覚

- ・「日本女子大生としての誇りある生活、生き方をしていってほしいです。」
- ・「“女子大” というものの価値が問われている現代社会において、共学の大学に劣らない視野の広さ、社会に出てからの責任ある行動などが必要である。しかしそのために品の良さを失わないように…」
- ・「「三つの教え」を実践してもらうことに要約されている。私も学生時代にはただの「かんばん」だったが、気がつくとしている。」
- ・「学歴としての日本女子大も結構ですが、私学の個性を身につけてほしい。創立時の心意気を感じられてドキドキした校歌“日本の文化を興す使命あり”」
- ・「先輩（私共）方は、目的意識をしっかりとって生活全般に主義を通して過ごしていただけることを忘れずに、ただ大学へという安易な気持ちを捨て、有意義に過ごして欲しい。」
- ・「女子大と限らずに節度を持った生活をしてほしい。今の世の中、（多分にマスコミにもよるが）女子大生＝派手に遊びまくる（勉学は期待しない）のレッテルがはられているが、火のないところに煙はたたない。誇りを持ってやってほしい。」
- ・「先輩方が残した、そして引き継がれている伝統を守り、且つ発展させてこれからも評価の高い大学を創り上げていてもらいたい。」
- ・「日本女子大学の建学の精神について、しっかりと学んでほしい。その上で、自己の確立を考えることを望む。」

- ・「自分の学校に対する愛校心や誇りをどのくらい持っているでしょうか。自ら「ボンジョ」等と呼ぶ人には成瀬先生の三つの教えの意味すら理解できないのではないのでしょうか。日本女子大だという誇りを持って社会のさまざまな職業につくことは素晴らしいことだと思います。」

h. 人間形成

- ・「社会にでると「状況」に左右されることが多々あるので、流されるのではなく「状況をつくる」人になれるような人格をつくってほしいと思います。」
- ・「流行、トレンドに流されず、しっかりした自分の考えを持ってほしい。人と同じであることに安堵感を持つよりも、自分の個性を大切にしてほしい。」
- ・「女性の進出とか地位の向上とかいわれはじめて久しいのですが、社会でも家庭でも女性には納得できない偏見や差別や苦勞がいっぱい。どこで何をしようかと、自分らしさを大切にプライドをもって生きていきたいものです。」
- ・「社会にでて、大切なのは学歴やそこで身につけたカラーではないということを実感した。自分の目指すものをとことん追及し、努力して自分の力とする素晴らしい人々が世の中にはたくさんいる。しっかりとした自分らしさをもち、自信をもって、責任をもって物事にとりくめる人でありたいと今、私は思っているのです。」
- ・「大学名は、ブランドではない。卒業した大学が問題ではなく、その人の生き方や能力が大切。自分独自の考え方や創造性を身につけておいたほうが良い。」

i. 子育て

- ・「良き母親になってほしい。次の世代をしっかりと支える子供を育てるようしつけのしっかりで

きる、母親が不足しているように思えます。自分のしたい事、活動は大学生社会人のうちにして子どもの成長の時はじっくり見つめられる母親になってほしいです。」

- ・「子育ても大事な社会的な仕事だと思います。1人の人間の人生を決める場合もあると思うこの頃です。社会に出て仕事をするのと同じ比重ではないかと思えます。子供自身が満足して過ごせる一生を支えるのも親のつとめだと思います。」
- ・「女性は女性としての立場からも、いくらでも、物を豊かに考えられていく“母親”になっていくとき、子供の成長には、大きく母親の姿勢が影響していくので女性としての人間形成を、しっかり、学んでほしい。」

j. その他

- ・「やはり、世間ではお嬢様学校という image が強いのでそれに負けないよう甘えずがんばってほしい。」
- ・「学生時代に何でもよいから生涯通じてかわっていけるものを見つけてほしい。またその地盤をきずいてほしい。」
- ・「学生一人一人を大切に、深く、人間として関心をもって交流してくれる学科の中で得たものは、社会に出てからも何にもかえがたい支えです。」
- ・「学生時代に人生の目標がピタと見つけれ人もいますが、暗中模索が普通、あせらないで下さい。もとめていけば、必ず見えてくるはずですよ。」
- ・「人生の中で、一番輝いている時に、核となるものをつかみとって欲しい。(核となるものは自分でみつけ出すように)。」
- ・「他大学の男子学生とも大いに交流しながら、

女性ならではの生き方をきわめてもらいたい。」

- ・「先輩たちの大きな業績や社会活動にもっと目を向けてほしい。」
- ・「長寿社会になって人生80歳くらいまで生きる時代になりました。この長いライフサイクルのそれぞれのステージをどう生きるか、大きな課題だと思います。人生は計算通りにはいきませんが、自分の長い一生を見通しながら生きられるよう、若い時から考える必要があります。」
- ・「大学にいかせてもらえる親への感謝を忘れないでほしいと思う。」
- ・「人に教えてもらうことはとても大事だけれど、人に頼りっぱなしでなく、自分の足で、自分から歩く人になってほしい。そのことに気づくのに私はとっても時間がかかったけど、少しでも早く気づいてほしいと思う。」
- ・「社会の中で目立たなくても、高尚な知性のある女性像にむかって明治の気骨ある女性を、お互い見習っていきましょう。」

k. 大学への提言

- ・「大変難しい問題かもしれませんが、「共学」の方向へ足を踏み出していただけませんか。いつまでも女子大では時代からとり残されてしまいそうです。成瀬先生は偉大でしたが、その時代はそれが先駆的だったのです。今は古めかしいとしかいいようがありません。先をみこしてお願いします。」
- ・「入学はやさしく、卒業は厳しくの態度を学校側はとってほしい。」
- ・「あまり学生本位にせず今までの伝統をもう少し伝えて欲しいと思う。」

卒業生動向調査 '92. 8

日本女子大学心理・教育学会
日本女子大学教育学科研究室

おねがい

本調査は教育学科卒業生その後の状況を知るために、日本女子大学心理・教育学会と研究室が行うものです。この調査結果は、コンピュータで集計・分析し、来年3月に発行される学科記念誌で報告する予定です。お手数ですが、御協力お願い申し上げます。

Q 1 あなたは第何回生ですか。

学科 回生 昭和 年入学
 年卒業

大学院 修博 回生 昭和
平成 年入学
 年修了

Q 2 あなたは下記のどの方法で日本女子大学に入学しましたか。

1. 一般入試→SQ 1へ
2. 日本女子大学附属からの進学→SQ 2へ
3. 外国人留学生入学→Q 3へ

SQ 1 (Q 2で1. に○をつけた方に伺います)

出身校は? (a. b. それぞれについて○をつけて下さい。)

- a. 1. 国立 2. 公立 3. 私立
b. 1. 共学校 2. 別学校

SQ 2 (Q 2で2. に○をつけた方に伺います)

あなたはどの段階から本学に入学しましたか。

1. 附属幼稚園から
2. 附属小学校から
3. 附属中学校から
4. 附属高等学校から

Q 3 あなたの a) 大学入学以前の住所はどこですか。また、b) 現住所はどこですか。あてはまる番号をそれぞれ□に記入して下さい。

1. 北海道・東北
2. 北関東(茨城、栃木、群馬)
3. 東京
4. 南関東(千葉、埼玉、神奈川)
5. 甲信越静(新潟、長野、山梨、静岡)
6. 東海(岐阜、愛知、三重)
7. 北陸(富山、石川、福井)
8. 近畿(滋賀、京都、大阪、兵庫
奈良、和歌山)
9. 中国(鳥取、島根、岡山、広島、山口)
10. 四国
11. 九州・沖縄
12. 海外

a) 入学前の住所
b) 現在の住所

Q 4 あなたは、日本女子大学での生活にどの程度満足していましたか。a~hについて「非常に満足」から「非常に不満」のいずれかの番号に○をつけてください。

	非常に満足	どちらか満足	どちらとも	どちらか不満	非常に不満
a. 専攻の学問の修得について	1	2	3	4	5
b. 教授陣の教育指導について	1	2	3	4	5
c. 教授陣とのふれあいについて	1	2	3	4	5
d. 校風について	1	2	3	4	5
e. 友人関係について	1	2	3	4	5
f. サークル・クラブ活動について	1	2	3	4	5
g. 施設・設備について	1	2	3	4	5
h. 職員のサービスについて	1	2	3	4	5

Q 5 学生時代の思い出として、今、あなたの心に最も強く印象に残っていることはどんなことですか。2つまで書いて下さい。

1.
2.

Q 6 あなたの日本女子大学での学習や体験は、卒業後の生活にどんな意味をもっていると思いますか。

--

Q 7 現在のあなたのお仕事について伺います。あなたは現在次のどれに該当しますか。

1. フルタイムで働いている—SQ 1.へ
2. パート・アルバイト・臨時雇用で働いている
3. 全く働いていない
4. その他 ()

SQ 1 (Q 7で1.と答えた方に伺います)

あなたの仕事は次のうちどれにあたりますか (1つに○)。

- | | | |
|--|---|--------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 経営者(重役)・役員 2. 課長以上の管理職 3. 係長・主任クラス 4. 一般従業者 | } | SQ 2, SQ 3.へ |
| <ol style="list-style-type: none"> 5. 個人営業・自由業(雇用者なし) 6. 自営業主(雇用者1~4人) 7. 家族従業者 8. その他 () | } | SQ 2.へ |

SQ 2 (Q 7で1.と答えた方に伺います)
業種は次のどれにあたりますか (1つに○)。

1. メーカー(製造業・建設業)
2. 商社
3. 百貨店・専門店
4. 金融・保険・不動産
5. 運輸・通信・電気・ガス
6. マスコミ・広告・調査
7. ソフトウェア・情報処理
8. 官公庁
9. 教育
10. その他 ()

SQ 3 (Q 7 SQ 1.で1.~4.と答えた方に伺います)

職種は次のうちどれにあたりますか (1つに○)。

1. 専門的・技術的職業
2. 管理的職業
3. 事務的職業
4. 販売の職業
5. サービス業
6. その他 ()

Q 8 下欄に結婚や出産と仕事の関わりについて、いくつかのタイプを示してあります。次のa~dについて、あなたの考えではそれぞれどれにあてはまりますか。該当するタイプの番号を()内にご記入下さい。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 結婚しないで仕事もち続ける 2. 結婚や出産にかかわらず仕事もち続ける 3. 結婚や出産をきっかけに仕事をやめる 4. 結婚や出産をきっかけに仕事をやめるが、子どもが一定の年齢になったら再び仕事につく 5. 仕事につかないで結婚する 6. 仕事につかないで結婚し、子どもが一定の年齢になったら仕事につく |
|---|

- a. あなたのお母さまの生き方→()
- b. あなたが学生時代に理想としていた
生き方→()
- c. これまでのあなたの実際の生き方
(結婚していない方は予想される生
き方)→()
- d. これからの若い人たちに期待したい
生き方→()

- SQ 4 (Q 9 で 1. に○をつけた方に伺います)
その結婚に際しては「日本女子大学の
卒業生」ということが一つの有利な条
件となっていたと思いますか。
- 1. そう思う
 - 2. そういうことはなかったと思う
 - 3. むしろ不利な条件だったと思う
 - 4. どちらともいえない・わからない

Q 9 結婚・家庭生活について伺います。

あなたは結婚していますか(したことがあ
りますか)。

- 1. 満()歳で結婚した→SQ 1～SQ 4 へ
- 2. 結婚していない→Q 12 へ

SQ 1 (Q 9 で 1. に○をつけた方に伺います)

それは恋愛結婚でしたか、それとも見
合い結婚でしたか。

- 1. 恋愛結婚
- 2. 見合い結婚
- 3. その他()

SQ 2 (Q 9 で 1. に○をつけた方に伺います)

その時、ご主人は何歳でしたか。

満()歳

SQ 3 (Q 9 で 1. に○をつけた方に伺います)

ご主人が最後に卒業(中退も含む)
された学校は次のどれにあたります
か。

- 1. 中学校
- 2. 高等学校
- 3. 各種学校、専門学校
- 4. 短期大学、高等専門学校
- 5. 四年制大学
- 6. 大学院
- 7. その他()

Q 10 (ご主人のいらっしゃる方に伺います)

ご主人の仕事は次のどれに該当しますか。

- 1. 専門的・技術的職業
- 2. 管理的職業
- 3. 事務的職業
- 4. 販売の職業
- 5. サービス業
- 6. 自営業主
- 7. その他()

Q 11 あなたにはお子さんがいますか。

- 1. いる→SQ 1. SQ 2. へ
- 2. いない→SQ 2. へ

SQ 1 (Q 11 で 1. に○をつけた方に伺います)

お子さんは男女あわせて何人ですか。

- 1. 一人
- 2. 二人
- 3. 三人
- 4. 四人以上

SQ 2 (Q 11 で 1. または 2. に○をつけた方に
伺います)

今後お子さんを出産する予定はありま
すか。

- 1. ない
- 2. ある→SQ 何人くらいですか

人位

Q12 あなたは現在、学生時代の友人とどのくらいつき合っていますか。

1. よくつきあっている
2. まあつきあっている
3. あまりつきあっていない
4. 全くつきあっていない

Q13 あなたにとって学生時代の友人との関係は、現在どのような意味をもっていますか。

1. とても重要であり、大事にしていきたい
2. あまりウェイトをおいていないが、何らかの形でつき合いは続けていきたい
3. 学生時代の友人関係よりも、他の人間関係を大事にしたい
4. その他 ()

Q14 以下に様々な活動があげてあります。a～kのそれぞれについて該当する番号に○をつけて下さい。

	1. 現在している	2. 過去にしていたことがある	3. 役員をしていたことがある
a. 趣味や資格を活かした活動 (茶道、生け花などの集りなど)	1	2	3
b. 学級・講座・教室などでの学習活動	1	2	3
c. 行政から委託された活動 (調停委員、民政・児童委員、 保護司、施設運営委員・理事など)	1	2	3
d. 地域社会活動 (自治会、子ども会育成活動、 青少年育成活動、PTA活動など)	1	2	3
e. 社会奉仕(ボランティア)活動	1	2	3
f. 政治活動	1	2	3
g. 組合活動(生協活動など)	1	2	3
h. 市民運動・住民運動	1	2	3
i. 婦人団体活動・婦人運動	1	2	3
j. 各種宗教活動	1	2	3
k. その他の活動 ()	1	2	3

Q15 あなたは同年輩の女性と比べて幸せだと思いますか。

1. 大変幸せだと思う
2. どちらかといえば幸せだと思う
3. どちらかといえば不幸だと思う
4. 大変不幸だと思う
5. どちらともいえない・わからない

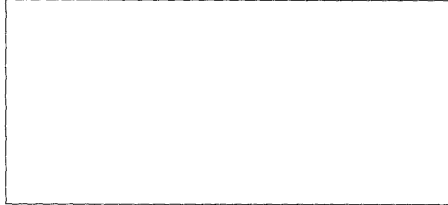
Q16 あなたは日本女子大学を卒業したことを、今どのように感じていますか。「よかった」あるいは「よくなかった」と思うことなど、自由にお書き下さい。

Q17 今あなたに女のお子さんがいると仮定して、そのお子さんの日本女子大学入学に、あなたは賛成ですか、反対ですか。またその理由は何ですか。

1. 賛成
2. どちらかといえば賛成
3. どちらかといえば反対
4. 反対

理由：

Q18 最後に、人生の先輩として、現在の日本女子大学の学生にアドバイスしておきたいことがあれば、どんなことでも結構ですからお書き下さい。



これで終わりです。御多忙のところ、御協力いただき有り難うございました。返信用封筒にて、9月10頃迄にご返送下さい。

日本女子大学教育学科43年記念事業企画委員会

- 委員長 岡野 恒也(教育学科教授、心理・教育学会会長)
- 委員 遠藤 明子(教育学科教授、教育学科主任) 柳田 ふさ(5回生)
國生 雅子(6回生) 中田 優子(8回生) 大菅 佳子(9回生)
芳野 紀子(15回生) 中原由里子(大学院生) 山口 珠保(大学院生)
小国万里子(学部4年生) 瀬尾和歌子(学部4年生)
- 実行委員
- 記念誌関係 山本 和代(4回生) 浅川 広子(12回生) 高品 淳子(14回生)
目澤 伸子(17回生) 依田 恭子(17回生) 蓮井 加代(18回生)
森本 明美(24回生)
- カット
記念パーティ関係 吉田奈美子(43回生) 他
桑平ミチ子(2回生) 山本 和代(4回生) 鈴木 光子(5回生)
丹羽 光子(9回生) 平沢 博子(11回生) 渡辺 昌代(18回生)
漆原 道子(18回生) 工藤 純子(25回生) 小林有美子(25回生)

平成5年3月10日発行

発行 日本女子大学四十三年記念事業企画委員会
日本女子大学教育学科研究室
日本女子大学心理・教育学会

〒112 東京都文京区目白台 2-8-1
日本女子大学教育学科研究室内
電話 03-3943-3131 内線7380
FAX 03-3942-6134

印刷 有限会社 三秀美術印刷
〒161 東京都新宿区下落合 2-6-18
電話 03-3952-9496
FAX 03-3952-9496
